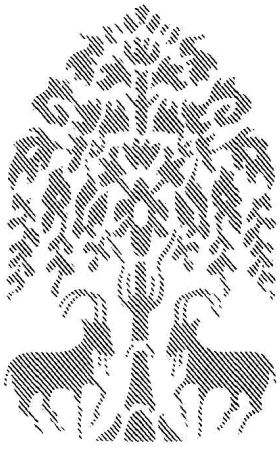
学研

漢和大字典

000491

学研
漢和大字典

藤堂明保 編



重庆医科大学附属第一医院图书馆
馆藏专用章

学習研究社

学研漢和大字典（机上版）定価　9000円

昭和55年11月10日　初版発行
昭和62年4月20日　第11刷発行

編　　者　藤堂明保
発行人　児山敬一
編集責任者　大山治義
印刷所　図書印刷株式会社
製本所　株式会社若林製本工場

発行所　株式会社 **学習研究社**
（〒145）　東京都大田区上池台4－40－5
振替・東京8－142930番

©GAKKEN　1980　本書内容の無断複写を禁じます。
☆この本の内容に関するお問い合わせ，製本上のミスなどがありましたら，下記あてお願いします。
文書は，東京都大田区上池台4丁目40番5号（〒145）
学研お客さま相談センター「学研漢和大字典」係
電話は，東京(03)726－8124（お客さま相談センター），
東京(03)726－8111（案内番号）
261 345　ISBN4-05-004548-6　Printed in Japan

編者のことば

この字典の執筆にとりかかってから、なんと十六年もの歳月が過ぎ去った。その間、執筆・校正の日々であった。今までの中国の辞典と日本の漢和辞典を見渡してみても、たとえば「服」という字が、なぜ、㈠服従の服と、㈡衣服の服という意味に使われるのかの疑問を解説したものがない。「服」とは、「ぴったりとくっつく」という意味だからこそ、ぴったり体につける服を衣服と呼ぶのである。また、布帛の布とは「平らに敷きのばすもの」という意味だからこそ、公布という場合には、しきのばすことを意味する。また、しきのばす動作を敷ともいい、ひろくしきのばすことを、普及の普という字が表すのである。この場合には、布―敷―普は、明らかに同系の「言葉の仲間」だといってよい。

だが、こういうとらえ方をするためには、何よりもまず、漢語の音韻論を武器として、周・秦・漢のころの「上古漢語」において、どれとどれの言葉が同じ発音（または、きわめて近い発音）であったかをたしかめなければならない。日本流になまった呉音読みや漢音読みで「同音」だからといって、上古の漢語でもそうであったとはかぎらない。また、甲骨文字や金文という古い字形の暗示するすがたから、原初的な文字の表そうとした意味をくみとる心がけも欠かせない。それだけの用意もなしに、たんなる古典学者や漢文の先生が字典を書くのは「木に縁って魚を求む」たぐいと言わざるをえない。

この字典では、音韻論によって復原できる発音の姿を「上古（周・秦・漢）―中古（隋・唐）―中世（宋・元・明）―現代（北京式ローマ字綴りもそえた）」の四段式に分けて、おもな親字につけた。さして重要でない字については、右のかわりに「某と同音」と記したが、これは、中古漢語をあらわす『広韻』や『韻鏡』において同音だという意味であり、上古において同音だとはかぎらない。

また、各字ごとに解字の項を設けて、原初的な字の成り立ちと、その表そうとした意味を解説した。さらに、同系の「言葉の仲間」を付記することによって、中心となる意味の理解を助けるようにした。また、紛らわしい類義語があるときには、相互の違いにも触れた。

最も苦心したのは、❶❷❸……と続く「意味」の解説である。先の例に示したように、動詞や形容詞・名詞など、さまざまな用法があるさい、その間には意味のつながりがあるはずである。それを見落としては字典としての値うちがないし、利用するがわでも、まとまった印象をくみとれない。この字典では、最も原初的な用法を❶に紹介して、以下つぎつぎに派生義を説くのを原則とした。しかし、常用される用法を先にして、利用者の便宜をはかった場合もある。また、日本の古訓の中には、その漢字の意味を理解するのに正しい方法を教えてくれるものもあるので、資料としてあげた。

字典づくりは、職人の仕事である。ひと刻みずつ彫りこむ職人のように、私も一字ずつの解説に念を入れてはきたが、なにしろ字が多い。見落としや、前後のくい違いが見つかるたびに、朱筆を加え、削ってはまた書きたし、書きたしては、くい違いを直した。そのたびに、編集部と、図書印刷の皆さんにご迷惑をかけた。我慢に我慢をかさねて、よくも今日までもちこたえてくださったものだと感謝にたえない次第である。

専門語の校閲と、付録の「中国の名著」「中国の詩」「中国文化史年表」については、学界中堅の俊秀を動員した。「中国の文字とことば」は、私みずから執筆した。また、本文中の資料図と「中国歴史地図」については、中国考古学・史学畑の大家の手を煩わせた。今までに例をみないりっぱなものである。ここにつつしんでお礼を申し上げる。

最後に、今一度、学習研究社社長古岡秀人氏には、終始変わらぬ御厚情をいただいた。ここに、衷心より厚くお礼を申し上げる。さらに、学習研究社専務取締役渡部ひろし氏、辞典編集部長大山治義氏、編集長川口久彦氏、亀岡紀子氏、また、図書印刷株式会社森繁俊・秋山明生・図師毅・渡辺英一・川端良一の諸氏の御尽力に対し厚くお礼申し上げる次第である。

昭和五十二年七月

藤堂明保

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

凡　例

一　親字について

(一)　収録範囲

この字典には、左の基準によって、約一万一〇〇〇字の親字を収録した。

(イ)常用漢字一九四五字（当用漢字一八五〇字＋常用漢字表で新たに加えられた漢字九五字）、人名用漢字一六六字。

(ロ)『現代新聞の漢字』（国立国語研究所報告資料）にみえる漢字。

(ハ)日本と中国のおもな古典の読解に必要だと思われる漢字。

(ニ)漢字の意味を系統的に理解するために必要な漢字。

(ホ)使用度の高い国字。

(二)　配列方法

(イ)『康熙字典』に準じた部首の順による。ただし、その漢字の成り立ちから判断して、他の部首のところに移動させた場合もある。

(ロ)同一の部首の中では、部首を除いた部分の画数の順。同一画数の中では、一般的な漢字音の五十音の順。訓のみの国字は、その訓の五十音の順。

(ハ)常用漢字と人名漢字については、新しい字体による部首および画数で配列した。ただし、従来の部首に入れられない場合、便宜上、新しく設けた部首がある。

(三)　見出しの体裁

親字の見出しは、左のように示した。

〈例〉

ノ 8 【乘】(9) 教　　ノ 9 【乘】(10)

a —　b —　c —　d —　e —　f —　g —　h —　i —　j —　k —

人 10 【傜】(12)　ヨウ(ヤウ)(呉)(漢)　(平)蕭(宵)　?-yiɛu-ieu-iau (yáo)　l —

a　部首と、部首を除いた画数

b　「当用漢字字体表」などに示されている漢字

c　総画数

d　当用漢字・教育漢字（当用漢字別表の漢字）・常用漢字表で新たに加えられた漢字・人名用漢字の区別

e　「当用漢字字体表」「常用漢字表」などに示される以前の旧字体

f　現代かなづかいによる音

g　歴史的かなづかいによる音

h　呉音・漢音・唐宋音・慣用音の区別

i　四声（上声・平声・去声・入声）の区別

j　『詩韻』（金・元以降の一〇六韻）にみえる韻の名

k　『広韻』（隋・唐の二〇六韻）にみえる韻の名

l　上古音（周・秦）—中古音（隋・唐）—『中原音韻』（元）—北京語および、拼音（北京式ローマ字）による現代音

(四)　字　体

(イ)当用漢字・常用漢字表で新たに加えられた漢字・人名用漢字は、それぞれ「当用漢字字体表」「常用漢字表」「人名用漢字別表」によった。

(ロ)「当用漢字字体表」などによって示される以前の字体、いわゆる旧字体については、比較的広く通用している字体を採録した。

(ハ)旧字体は、親字の下に示した。ただし、単に活字の形だけの相違で、字体の本質とは関係がないと思われるものは、とくに旧字体とはしなかった。

(ニ)(イ)に含まれない漢字で字体が二種類以上ある場合は、とくに広く通用しているもの、または、その漢字の成り立ちから判断して原形に近いものを採用し、他を異体字とし 字体 の下に示した。

(ホ)いくつもの漢字に含まれる共通の要素は、なるべく統一した。

〈例〉　皀（卽・喞など）　巛（緇・淄など）

(ヘ)「当用漢字字体表」などによって示された新字体が、二つ以上の旧字体の音と意味をもっている場合は、一二 で区別した。

〈例〉

J 3 【予】(4) 教　一【予】　二 豕 9 【豫】(16)

(五)　音・訓・読み

(イ)字音は、呉音・漢音・唐宋音・慣用音の区別をして、まず現代かなづかいでそれを示し、歴史的字音がなを（　）の中に示した。そのさい、国語資料に未見の音であっても『広韻』と『韻鏡』によって同音字から、呉音・漢音を推定して示した。

(ロ)「当用漢字音訓表」に示された音と訓は、当用音訓 の下に、また、常用漢字表で新たに加えられた漢字の音と訓は、常用音訓 の下に音はかたかな、訓はひらがなの太字で示した。

(ハ)音の相違が意味におよぶ場合は、㊀㊁によって区別し、音と意味とを対応させた。

(ニ)意味の理解をたすけるために、一般に定着している訓、漢文訓読のさい、しばしば使用される訓、日本の古訓資料の中で、すでに日本語の読みとして定

着した訓などを選び、各品詞の下に太字で示した。その場合、文語形が現代語と相違するもの、また、現代かなづかいと相違するものは、その文語形を歴史的かなづかいで（　）の中に示した。

(ホ)その漢字が漢文訓読のさい、サ変動詞・形容動詞、および副詞の形で用いられるものは、その形を品詞の上に示した。

〈例〉 意味 ❶なり（形）人あたりがよくて、口先がうまいさま。
❷ナイ（動）口先うまくとり入る。おもねる。

(六)

四声・韻

親字の下または左に、その漢字の四声と韻を示した。ただし、金・元代の『詩韻』は通俗書であり、言語資料としては役に立たない。そこで各字についてまず『詩韻』の韻を示し、ついで（　）の中に『広韻』の韻の名を示した。両者が同じ韻であるときは、この手続きを省略した。

(七)

中国語音

(イ)おもな親字の下または左に、上古―中古―中世―現代までの音の変遷をローマ字で示した。ただし、中世（十四世紀）に成立した『中原音韻』は収録字が少ないので、同音の字から推定した音を示した場合がある。現代の北京語の音については、「漢音拼音方案」によるローマ字綴りを（　）の中につけ加えた。現代音が、上古・中古音から、著しく不規則な変化をしたものについては、「‥‥」の形によって、つながりが不明なことを示した。

(ロ)さして基本的ではない漢字については、「‥と同音」のようにして『広韻』にみえる同音字をあげ、ローマ字による音の変遷を省略した。ただし、そのさい、上古音は必ずしも同じではない。

(ハ)同じ字について『広韻』にいくつもの発音が示されているときは、意味の違いがある場合は列挙し、そうでないときは、一部省略した。また、現代音は、『新华字典』と『中日大辞典』（愛知大学編）に収録されているものを重点的に示した。

(八)

意味の記述と品詞

(イ)意味の下に、親字の意味を❶❷❸‥‥の順に解説した。そのさい、その漢字の成り立ちにもとづく原義を第一として、順次、派生義に及ぶように配慮した。

(ロ)同音による借用義は、▽の下に「‥‥に当てた用法」として説明した。

(ハ)常に二字以上の熟語の形で用いられるものや、外国語をあらわす仮借的用法（当て字）などは、左のような形で説明した。

〈例〉 ❸「勿勿（ブブ）」とは、あわただしく、心がそぞろなさま。

(ニ)親字の意味を用法上から品詞に分類して示した。そのさいの品詞の分類は、漢語の文法で一般に使われるものによった。⇩略語・記号一覧

(ホ)漢字本来の意味と異なった日本語特有の意味・用法がある場合は〔国〕の記号のあとに、❶❷❸‥‥の順にその意味を説明した。そのさい、品詞名は省略した。また、起源的に同じ仲間だと思われるものは、❶❷❸の中を、(イ)(ロ)(ハ)‥‥に細分した。

(ヘ)〔国〕の場合、その漢字が一字で単独に読まれるものは、その読みを太字のひらがなで示した。

〈例〉 〔国〕❶**もよおす**（ヤ五）用意を調えて行事を行う。
また、宴を行う。「開催」

(ト)その漢字の意味に、同義・反義・類義の漢字がある場合は、同・対・類の記号の下に、それらの漢字を示した。

(九)

用例

親字の意味の理解をたすけるために、中国古典および、日本漢文の中から用例を採録した。その場合、原文に歴史的かなづかいで読み下し文をつけた。

(十)

成り立ち

(イ)すべての親字に、その漢字の成り立ちを解字の記号の下に解説した。また、基本的な漢字には、甲骨文字・金文（金石の字）・古文・籀文・篆文（小篆）・楷書に至る字形の変遷図をつけた。そのさい、その漢字の成り立ちの理解をたすけるために、他の漢字の偏旁で金文・古文として示したものもある。

(ロ)漢字の成り立ちおよび、意味の理解をさらに深めるために、単語家族に分類した同系の漢字の解説を補足した。

(ハ)日本語の訓が同じで、意味に違いがある漢字（同訓異義字）については、成り立ちの解説のあとに、その違いを解説した。

(十一)

古訓

(イ)『新撰字鏡』『倭名類聚抄』『類聚名義抄（観智院本・図書寮本）』から、その漢字の訓を採録して、古訓の記号の下にカタカナで示した。ただし、観智院本については、漢字の部分はそのままにした。また、異体字として字体の記号の下に示した漢字および、筆写によって字形が異なるものの訓も採録した。

(ロ)採録にあたってはなるべく本文に従った。それぞれの索引を参照して、疑問のあるものも、＊印をつけて採録した。

(ハ)『倭名類聚抄』で、四等官に該当するものは、長官・次官・判官のみを、また、地名は旧国名のみを採録した。図書寮本は、その索引のみを使用し、観智院本で「アタル」のように表記されているものは、「アタル・（アツ）」の形で示した。

(ニ)親字の意味説明が「A B」とはの形になっているものは、「A」の親字のところだけに示した。

(ホ)配列は、資料の成立年代の古い順にした。ただし、同一資料の中は、五十音順にした。⇩出典名一覧

(十一) **名のり**

当用漢字・常用漢字表で新たに加えられた漢字・人名用漢字には、名のり の下に、その漢字が人名として一般に用いられる読みを、五十音順に示した。

(十二) **親字が下につく熟語**

▽の記号の下に、その親字が下になって構成される二字の熟語を画数順に示した。

(十三) **検　索**

(イ)旧字体および、異体字は、その所属する部首・画数の末尾に、検索のための見出しをたてた。

(ロ)部首の判別しにくい漢字については、その漢字の部首を除いた画数の末尾に検索のための便宜上の見出しをたてて検出できるように配慮した。

三　熟語について

(一) **収録範囲**

熟語は、左の基準によって、約七万語を収録した。

(イ)中国のおもな古典にみえる語句・故事成語・おもな人名と地名。

(ロ)中国のおもな古典の書名および、漢文で表記されている日本の書名。

(ハ)日本のおもな古典にみえる語句および、現代生活に必要と思われる難読の語。

(ニ)仏典にみえるおもな仏教語。

(二) **配列方法**

(イ)熟語の二字目の画数の順による。二字目が同画の場合は、その漢字の読みの五十音順。

(ロ)ゝ点読みをする熟語は、熟語の末尾。

(三) **見出しの体裁**

熟語の見出しは、左のように示した。

〈例〉

【傍観(ボウカン)(バクワン)】
a ―
b ―
c ―

【了(*諒)承(リョウショウ)(レウシヨウ)】
d ―
e ―

a　旧字体
b　現代かなづかいによる読み
c　歴史的かなづかいによる読み
d　「常用漢字表」にない漢字を示す記号
e　同音の漢字により書きかえられる字

(イ)二字目以下の漢字が、新字体と旧字体で著しく異なる場合は、その旧字体を（　）の中に示した。

(ロ)「常用漢字表」にない漢字には、その漢字の右上に＊のしるしをつけた。また、「常用漢字表」で新たに加えられた漢字には、その漢字の右上に○のしるしをつけた。ただし、「常用漢字表」で新たに加えられた漢字の中で、表で示されている字体と異なる漢字には、右上に△のしるしをつけた。

(ハ)国語審議会報告資料の「同音の漢字による書きかえ」に該当する熟語は、書きかえる漢字を《　》の中に示した。

(四) **読　み**

(イ)熟語の読みは、現代かなづかいによって、音読みはカタカナ、訓読みはひらがなで、語構成にしたがって二行にわけて示した。そのさい、現代の字音かなづかいが歴史的な字音かなづかいと異なるものは、その歴史的かなづかいを（　）の中に示した。ただし、従来のものに異説があっても、まだ定着していないときには、便宜上、従来のままの歴史的かなづかいを示したので、親字の場合と異なる場合もある。また、梵語や外国語からの音訳語、当て字による日本語の読みなどは、語構成を無視して一行で示した。

(ロ)熟語の読みに二つ以上ある場合は、一般的な読みを先にした。

(ハ)音読みと、返り点読みの二つがある場合は、音読みを先にした。

(ニ)読みの違いによって意味が異なる場合は、一二三……の記号で区別した。

(五) **意味の記述**

(イ)意味の記述は、その熟語の原義に近い順に①②……とした。

(ロ)日本語特有の意味がある場合は、〔国〕の記号の下に、その意味を説明した。

(ハ)その熟語が、仏教語・俗語である場合は〔仏〕〔俗〕の記号で示した。〔俗〕には、宋・元・明の俗語から現代中国語まで含まれる。読みは音読みとしたが、とくに現代俗語については、北京語の読み方をカタカナで示した。

(ニ)その熟語に、同音同義・異音同義、および、反対の意味の熟語がある場合、また、偏が異なるのみで、同音同義の熟語がある場合は、それぞれ、同・異・対・＝の記号をつけて、その熟語を示した。

(ホ)熟語で、下にくる漢字の意味の理解をたすける必要がある場合には、▽の下に、その漢字の意味を簡単に説明した。

(六) **用例と出典**

(イ)熟語の意味の理解をたすけるために、中国の主要古典および、日本漢文の中から採録した用例を示した。その際、その熟語の典拠を示すために、たんに出典名のみを示したものもある。

(ロ)その熟語の典拠である用例が熟語の見出しの形と同一でないものは、▽の下にそのことを説明した。

(七) **古　訓**

意味とは関係なく、日本の古訓資料にみえる訓を、古訓 の記号の下に示した。その体裁は親字の場合と同じ。

(八) **検　索**

(イ)音読みと返り点読みの二つの読み方がある熟語のうち、重要と思われるものについては、返り点読みをする見出しを、検索のために熟語の末尾に立てた。

(ロ)「同音の漢字による書きかえ」資料によって書きかえる熟語は、検索見出しをたてた。

(九) **参照項目**

付録で解説してある事項については、⇩付録「中国の文字とことば」のように示した。

目　付録について

付録には、漢字・漢文・中国語・中国史・中国文化などの理解に役立つように左の六つの内容を収録した。

(一)『中国の文字とことば』…漢字の成り立ち、漢字の字体の変遷、漢字の音、中国語の音韻体系の変遷、『広韻』『韻鏡』『詩韻』『中原音韻』などの解説、日本の上代特殊かなづかい、呉音・漢音・唐宋音の由来などの解説。

(二)『中国の名著』…『詩経』から『紅楼夢』にいたる、中国の思想・文学・歴史・地理・芸術・言語・文字などに関する重要な書物三二〇点の解説。

(三)『中国簡体字表』…現在、中国で使用されている簡体字、その繁体字（旧字体）、日本の当用漢字の比較一覧表。

(四)『中国の詩』…詩型を中心にした『詩経』から現代詩までの解説。

(五)『中国文化史年表』…文化史に中心をおいた、中国史の年表と解説。

(六)『中国歴史地図』…中国の歴史および文化に関係ある四色刷りの地図。

《出典名一覧》

本書で引用した出典名のうち、略称を用いたもののみを左に示す。篇名も、適宜、簡略にして示した。

易経（周易）	〔易・乾〕	呂氏春秋	〔呂覧・為欲〕
書経（尚書）	〔書・堯典〕	孔子家語	〔家語・三恕〕
詩経（毛詩）	〔詩・周南・関雎〕	世説新語	〔世説・言語〕
春秋左氏伝	〔左伝・昭二〇〕	列女伝	〔列女・鄒孟軻母〕
春秋公羊伝	〔公羊・宣一三〕	白虎通義	〔白虎通〕
春秋穀梁伝	〔穀梁・文一〇〕	風俗通義	〔風俗通〕
論語	〔論・学而〕	経典釈文	〔釈文〕
孟子	〔孟・梁上〕	説文解字	〔説文〕
韓非子	〔韓非・顯学〕	後漢書	〔後漢・光武〕
戦国策	〔国策・秦〕	三国志	〔魏志・武帝〕
三国志	〔蜀志・劉焉〕	日本外史	〔頼山陽・外史〕
〃	〔呉志・孫堅〕	新撰字鏡	（新）
旧唐書	〔旧唐・馮唐〕	倭名類聚抄	（和）
新唐書	〔新唐・太宗〕	類聚名義抄	
資治通鑑	〔通鑑・漢高祖元〕	図書寮本	（図名）
古事記	〔記〕	観智院本	（観名）
日本書紀	〔紀・神代〕		

《略語・記号一覧》

呉 漢 唐 慣	呉音・漢音・唐宋音・慣用音
平 上 去 入	平声・上声・去声・入声
〈名〉	名詞
〈動〉	動詞
〈形〉	形容詞
〈副〉	副詞
〈助動〉	助動詞
〈接続〉	接続詞
〈感〉	感動詞
〈指〉	指示詞
〈前〉	前置詞
〈代〉	代名詞
〈疑〉	疑問詞
〈助〉	助詞・接頭辞・接尾辞
〈単位〉	単位詞
〈数〉	数詞
意味	親字の意味
解字	漢字の成り立ちの解説
古訓	古訓資料
字体	異体字関係
名のり	人名としての訓読み
当用音訓	当用漢字の音訓とその例、および、参考事項の解説
常用音訓	常用漢字表に加えられた漢字の音訓とその例、および、参考事項の解説
▽	親字が下につく熟語
〔国〕	日本語特有の親字の意味
同	同音同義の親字・熟語
対	反義の親字・熟語
類	異音同義の親字・熟語
‖	偏が異なるのみで、同音同義の熟語
▽	補説、参考事項の解説
〔俗〕	俗語
〔仏〕	仏教語
〔国〕	日本語特有の熟語の意味
*	常用漢字表にない漢字
○	常用漢字表で新たに加えられた漢字
△	常用漢字表の字体と異なる字体の漢字
+	常用漢字表で、当用漢字に追加した音訓
当	当用漢字
常	常用漢字表で新たに加えられた漢字
教	教育漢字
人	人名用漢字
〈　〉	五六年度に新たに追加された人名用漢字の字体
〈国字〉	国字
甲	甲骨文字
金	金石文字
古	古文
籀	籀文
篆	篆文
楷	楷書

一 部

一【一】(1)教 イチ(慣)・イツ(漢) (入)質 ・iet・iët・ioi・i(yi)

当用音訓 **イチ**「一言・逐一」 **イツ**「一刻・画一」 **ひと**「一息」 **ひとつ**「一つ」 ▽「一日(ついたち)」「一人(ひとり)」

意味 ❶(数)**ひとつ** 数のひとつ。また、人数のひとり。同壱。「一字」「定于一＝一に定まる」(孟・梁上) ❷(数)**ひと** 順番の一番め。同壱。「一月一日」「一位」 ❸(動)**ひとつにする**(にする)・**ひとつとなる** ひとつにまとめる。また、ひとつにまとまる。「統一」「一意専心」「執能一之＝執たがよくこれ(天下)を一にせん」(孟・梁上)「聖人出而四海一＝聖人出いでて四海一となる」(欧陽脩・豊楽亭記) ❹(形)(「一…」の形で) …じゅうすべて。…のすみからすみまで。「一天(空じゅう)」「一国慕之＝一国これを慕ふ」(孟・離上) ❺(形) 同じであるさま。「其揆一也＝その揆(やり方)一なり」(孟・離下) ❻(動) 同じくする。一致させる。「一致而百慮＝致む(趣旨)を一にして慮を百にす」(易・繫辞下) ❼(動) ひとつのもの、また、同じものとして扱う。いっしょくたにする。「一死生為虚誕＝死生を一にするは虚誕(でたらめ)たり」(王羲之・蘭亭集序) ❽(副)**もっぱら** ひたすら。「欲一以窮之＝一にもつてこれを窮めんことを欲す」(礼記・礼運) ❾(副) なんと。「一至此乎＝一にここに至るか(なんとこうまでなったか)」(呂覧・知士) ❿(副)**ひとたび** 一回。一度。「一戦勝斉＝一たび戦ひて斉に勝つ」(孟・告下) ⓫(副)**ひとたび** もしいちどでも…したら。「此地一為別＝この地一たび別れを為せば」(李白・送友人) ⓬(副)**すこし** ちょっと。わずかに。「一見」「不一動其心＝一もその心を動かさず」(小学・善行) ⓭(形) あるひとつの。また、あるひとりの。「一朝」「一少年」 ⓮(副)・(接)(副) …したり…したり。▽「一…一…」の形で用いられる。「一則以喜、一則以懼＝一はすなはちもつて喜び、一はすなはちもつて懼る」(論・里仁)

解字 一本の横線で、ひとつを示す指事文字。咽ッ(のどがいっぱいに詰まる)と同系で、ひとつの意のほか、全部をひとまとめにする、いっぱいに詰めるなどの意を含む。壱ッの原字壹は、壺ッにいっぱい詰めて口をくびったさま。▽証文や契約書では、改竄ッや誤解をさけるため、壱と書くことがある。

字体 【弋】は「一」の異体字。

古訓 オナシ・キハム・サウ・チヒサシ・トモ・トモシ・ヒトタ・ヒトツ・ヒトリ・モハラ(観名)

名のり おさむ・かず・かた・かつ・くに・すすむ・たか・ただ・はじむ・はじめ・ひじ・ひで・ひと・ひとし・まこと・まさし・もと

▽一一・万一・不一・尺一・太一・主一・守一・同一・画一・単一・専一・帰一・逐一・純一・唯一・執一・第一・統一

【一一】イチイチ ①一つ一つ、ていねいに行うさま。「好一聴之＝一これを聴かんことを好む」(戦非・内儲説上) ②ひとりびとり。めいめい。③どれもこれも。ずっかり。

【一人】(一)イチジン 天子。▽天下にひとりしかいないの意。(書・太甲下) (二)イチニン ①どういう人かわからないが、とにかく、ひとりの人。ある人。「中有一人字太真＝中に一人有り字なづは太真」(白居易・長恨歌) ②ひとり。(三)ひとり (国)摂政・関白の別名。古訓ヒトリ(観名)

【一人当(當)千】イチニントウセン ひとりの力で千人に匹敵できる。力や勇気のあることのたとえ。▽「当」は相当する。「一騎当千」とも。(北史・唐邕)

【一入】しおしお (国)①染め物を一度染め汁に浸すこと。②いっそう。ひときわ。古訓ヒトシホ(観名)

【無二一丁字一】イッテイジナシ・イッチョウ(チャウ)ジナシ 一つも文字を知らない。無学であることのたとえ。▽「丁」は、「个」の篆書ッを誤ったもの。「个」は、「個」と「箇」と同じ。「不」識二一丁字一」とも。(新唐・張弘靖)

【不」識二一丁字一】イッテイジを・しらず 「無二一丁字一」と同じ。

【一刀両断(兩断)】イットウ(タウ)リョウダン ①ひと太刀で物をまっ二つに断ち切る。②きっぱりと物事を処理する。(朱子語類)

【一二】イチ ①一つ二つ。わずかな数のこと。「時得一二遺八九＝時に一二を得て八九を遺ふす」(蘇軾・石鼓歌) ②いちいち、ていねいに行うさま。古訓ツハヒラカニ(観名)

【如」出二一口一】いずるくちのごとし ひとりの口から出たようである。多くの人のいうことが一致することのたとえ。(国策・楚)

【一子相伝(傳)】イッシソウ(サウ)デン 〔国〕学芸などの秘けつを自分の子のひとりだけに伝えて、他には伝えないこと。

【一寸】ちょっと 〔国〕①少しの間であるさま。②数量・程度がわずかであるさま。③簡単に。▽下に、打ち消しのことばを伴う。

【一寸丹心】タンシンの 自分の真心を謙そんしていうことば。▽ほんのわずかの真心の意。

【一寸光陰不」可」軽(輕)】イッスンのコウ(クワウ)インからんすべからず わずかな時間も、むだに過ごしてはならない。▽「光陰」は時間。(朱熹・偶成)

【一大事】イチダイ ①一つの重要な事件。②非常に重大な事件。③〔仏〕仏がこの世の真理をみきわめる事業。この世の生き物を救うために、仏がこの世に出現すること。(法華経・方便品)

【一円(圓)】イチエン 〔国〕そのあたり全体。

【一介】カイ ①人ひとり。②わずか。少し。▽平凡でとるにたらないものをいう。＝一芥。

【一介*之士】イッカイの 識見の狭い、かたくなな人。つまらない男。

【一元】ゲン ①物事のもとが一つであること。②その天子の時代に用いる、一つの年号。③数学で、方程式の未知数が一つであること。「一元二次方程式」

【一元論】ロンゲン 哲学で、宇宙に存在するすべてのものは、その根元がただ一つであるとする考え方。▽二元論・多元論に対する。

【一犬*吠形百犬*吠声(聲)】イッケンかたちにほゆれば ヒャク(ヘヤク)ケンこえ(こゑ) 一匹の犬が何かを見てほえると、それにつられて多くの犬が訳もわからずにほえる。ひとりがほんとうらしいことをいうと、訳も知らずに、多くの人が騒ぎたてることのたとえ。「一犬吠虚万犬伝＝実」(潛夫論・賢難)

【一五一十】イチゴイチジフ(ジフ) 一から十まで。はじめから終わりまでのすべての詳しい事情のこと。一部始終。＝一伍一什。

【一切】サイ ①すべて。②しばらく。一時。③同時に。▽①～③は「イッセツ」とも読む。④〔仏〕すべての事物をそなえる。⑤〔国〕まったく。▽下に打ち消しのことばを伴う。古訓アマネシ(観名)

【一切経(經)】イッサイキョウ(キヤウ) 書名。「大蔵経」のこと。⇩付録「中国の名著」

【一切衆生】イッサイシュジョウ(ショウ) 〔仏〕この世に生存するすべての生き物。(涅槃経)

【一心】シン ①そのことだけを思うひたすらな思い。〔国〕専心。(孟・告上) ②心。③考えを同じにして協力すること。また、多くの人の一致した考え。④〔仏〕概念を離れ、差別のない絶対平等の世界。真如ッ。古訓ココロヲモハラニス(観名)

【一心不乱(亂)】イッシンフラン 心を一つの事に集中し、いっしょうけんめいすること。

【一心同体(體)】ドウタイ 心を一つにし、からだを同じにする。考えを同じにして一致協力すること。

【一心専(專)念】センネン 〔仏〕ひたすら仏を念ずる。(往生論)

【一水】スイ ひとすじに見える川。「一水牽愁万里長＝一水愁ひを牽いて万里長し」(李白・横江詞)

【一双(雙)】ソウ(サウ) 二つで一組となるもの。一対。

【一天】テン ①空全体。②君主のこと。③〔国〕世の中すべて。▽「一天下」の略。

【一天万乗(萬乗)】バンジョウ 天子のこと。一天万乗の君。▽周代、天子は戦時に戦車一万台を出したことから。「乗」は、車を数えることば。

【一日】ニチ・ジツ ①朝から夕方まで。類終日。「槿花一日自為栄＝槿花(むくげの花)一日みづから栄を為なす」(白居易・放言) ②ある日。③月の第一日。ついたち。類朔日サク。

【一日三秋】サンシュウ(シウ) 一日あわないと、三年間もあわないような気持ちがする。非常に待ち遠しく思われること。▽「秋」は、一年、または、三か月とも。「一日千秋」とも。(詩・王風・采葛)

【一日千里】センリ ①一日に千里も走るようなすぐれた馬。(史記・項羽) ②非常に才能のすぐれた人のこと。

【一日千秋】センシュウ(シウ) 「一日三秋」と同じ。

【一日*之長】チョウ(チャウ)の ①年齢が少し多いこと。(論・先進) ②経験や腕まえが少しすぐれていること。「臣於数子有一日之長＝臣は数子において一日の長有り」(新唐・王珪)

【一日暴(曝)*之十日寒】ジュウジツこれをあたためて ジュウ(ジフ)ジツこれをひやす 一日暖め育てて、十日冷やして傷つける。修養の効果があがらないこと。「一暴十寒」とも。(孟・告上)

【一日難(難)三再*晨】ふたたびあしたなりかたし 一日の

うちに、朝は再びこない。時は過ぎやすく、若いときは再びこないことのたとえ。〔陶潛・雜詩〕⇨歳月不待人（六八八ページ）

【一分】㊐イブン　全体のうちのわずかな一部分。㊀イチブン　その人一身の面目。

【一片】イッペン　①ひとひら。ひと切れ。②そのあたり一帯。一面。「長安一片月＝長安一片の月」〔李白・子夜呉歌〕③少し。わずか。

【一片氷心】イッペンのヒョウシン　ひとかけらの氷のように澄みきった清い心。「洛陽親友如相問一片氷心在玉壺＝洛陽の親友もしあひ問はば、一片の氷心玉壺に在り」〔王昌齢・芙蓉楼送辛漸〕

【一方的】イッポウテキ　〔国〕①一つの立場や、一つの見方だけにこだわって行動したり考えたりすること。一面的。②自分のことだけを考えて行うさま。

【一文字】イチモンジ　〔国〕①「一」の字の形。②横にまっすぐなこと。③掛け軸の上下につける細い布。

【一札】イッサツ　①一枚の書き物。②〔国〕「一札入れる」とは、謝罪や約束を記した文書を相手に差し出すこと。

【報一矢】ムクいる　①敵の攻撃に対して、一本の矢を射かえす。②相手の反対論に対して、ひと言、効果的に反論すること。わずかながらも反撃する。

【一〇汁一菜】イッチジュウイッサイ　一種類の汁と、一種類のおかず。質素な食事のこと。

【一生】イッショウ　①うまれてから死ぬまでの間。一生涯。②生きていることは一度だけであること。

【一生面】イッセイメン　〔国〕①新しい分野・方面。新生面。②新しいやり方。新機軸。

【一生懸命】イッショウケンメイ　〔国〕→一所懸命

【一世】㊀イッセイ　①〔仏〕過去・現在・未来の三世の中の一つ。②一生涯。㊁イッセイ　①人の一生。一代。②その時代。その当時。「固一世之雄也＝もとより一世の雄（英雄）なり」〔蘇軾・赤壁賦〕③三十年。④世の中の人全部。⑤〔国〕同名の君主・法王・皇帝の中で最初に即位した人。⑥〔国〕移民などの最初の代の人。

【一世一代】イッセイチダイ　〔国〕①一生。生きている間。②芸人などが引退するときに、それを最後として得意の芸を演じること。③一生のうち二度とないほどのすぐれたわざを示すこと。

【一石二鳥】イッセキニチョウ（ニチウ）　一つの石で同時に二羽の鳥を落とすこと。一つの物事を行って、同時に二つの利益を得ることのたとえ。一挙両得。

【一代】イチダイ　①人の一生。②その時代。その当時。③一つの王朝が存続している期間。〔漢書・王莽〕

【一代記】イチダイキ　〔国〕その人の一生のことを記した本。伝記。

【一・旦】イッタン　①ある朝。また、ある日。②ひとたび。▽物事がおこるのを仮定するときに用いる。〔荘子・胠篋〕③〔国〕ひとまず。いちおう。

【一・旦有二緩急一】カンキュウアラバ　ひとたび緊急な事件がおこったならば。「一旦有急イッタンキュウアラバ」とも。〔漢書・愛盎〕

【一・半】ハン　半分ずつに二分したときの一方。また、あい半ばすること。「山中一半雨＝山中一半の雨（晴れたり降ったりする天候）」〔王維・送梓州李使君〕

【一辺（邊）倒】トウ（タウ）　〔国〕趣味・思想などの傾向が一方だけにかたよること。

【一目散】イチモクサン　〔国〕急いでいっしょうけんめいに走るさま。

【一目・瞭然】イチモクリョウゼン　物事の状態などがたやすく、はっきりわかるさま。ちょっと見ただけで、はっきりとわかること。

【一目○羅不レ可二以得一鳥】イチモクのラは　一つの網の目では、鳥を捕らえることはできない。賢人を招くには礼をつくさなければならないことのたとえ。また、政務などで、ただひとりの人に任せただけでは多くの人をおさめることはできないことのたとえ。〔淮南・説林〕

【一衣帯（帶）水】イチイタイスイ　一本の帯のように狭く長い川。互いに、川や水をへだてて距離の近いことをいう。「豈可限一衣帯水、不拯之乎＝あに一衣帯水を限りて、これを拯はざるべけんや」〔陳書・後主〕

【一回忌】イッカイキ（クワイ）　人の死から、満一年後の同月同日に行う法事。一周忌。

【一気（氣）】イッキ　①大気。②万物の根本の力。〔荘子・知北遊〕③休まず勢いよく行って一度で終えてしまうさま。

【一気（氣）・呵成】カセイ　①ひと息に文章を書きあげること。②物事をひと息にやり遂げること。

【一・匡】イッキョウ（キヤウ）　秩序をたてて天下を統一すること。〔論・憲問〕

【一曲】イッキョク　一方にかたよって全体に通じないこと。

【一件】イッケン　①一つの事件。②〔国〕あの事がら。例のこと。

【一向】イッコウ（カウ）　①ひたすら。②〔国〕少しも。▽下に打ち消しのことばを伴う。

【一行書】イチギョウショ（ギヤウシヨ）　簡単な手紙。

【一再】イッサイ　①一・二回。▽日本語では多く、下に打ち消しのことばを伴う。②たびたび。

【一字】イチジ　①短い手紙。「親朋無一字＝親朋ホウホウ一字無し」〔杜甫・登岳陽楼〕②別の字。あざな。

【一字千金】イッチセンキン　すぐれた文章や筆跡をほめていうことば。▽一字で千金の値うちがある文章や、文字の意。〔史記・呂不韋〕

【一字・之師】イッチシの　詩や文の、たった一字を直してくれた人でも、やはり先生であるということ。〔唐才子伝〕

【一字○褒・貶】イッチホウヘン　詩や文の、一字の使いわけで、人をほめたりけなしたりすること。〔杜預・春秋左氏伝・序〕

【一存】㊀イッソン　この世の中に一度だけ存在する。㊁イッソン　〔国〕ほかの人に相談しないで、その人ひとりだけで決めた考え。

【一・朶】イチダ　①一枝の花ぶさ。②ひとむらがり。

【一・如】㊀イチジョ　純粋でまじりけのないこと。㊁イチ　〔仏〕真理は一つで平等無差別であること。▽もともと、仏と人、仏と魔も二つのものではない意。

【一団（團）】イッダン　一つの集まり。

【一・任】イッニン　すべてをその人に任せる。

【一応（應）】イッオウ　①すべて。いっさい。②〔国〕ひととおり。ひとまず。一往。

【一局】イッキョク　囲碁・将棋などの一勝負。

【一・系】イッケイ　ひと続きだけの血筋。「万世一系」

【一芸（藝）】イッゲイ　①ある一つの経書。②ある一つの技術・芸能。

【一言半句】イチゲン・イッチゲン　わずかなことば。「一言半辞」「片言隻句」とも。

【一言居士】イチゲンコジ　何にでも自分の意見を述べないと気のすまない人。

【一言出レ口・駟不及レ舌】シモシたニおよばず　たったひと言でも誤ったことをいえば、駟（四頭だての馬車）で追っても追いつけない。ことばは慎まなければならないことのたとえ。〔旧唐・孫伏伽〕

【一見識】イッケンシキ・イチケンシキ　そのことについてのあるすぐれた考え。

【一見如レ旧（舊）】キュウ（キウ）のごとし　一度あっただけで、気がよくあい、古くからの知りあいのようになる。▽「旧」は、昔からの友人。

【一更】イッコウ（カウ）　五更の一つ。日没から夜明けまでの時間を五つにわけたその一番め。初更。甲夜。一鼓。

【一身】イッシン　①ひとりのからだ。自分のからだ。②自分ひとり。自分自身。

【一体（體）】イッタイ　①一つのからだ。▽親密で、離れない間がらにたとえる。②手・足など、なくてはならないからだの一部分。また、学徳などの一部分をたとえる。③ある一つの体裁。④いちように。⑤同じ体裁のもの。⑥〔国〕一般に。おしなべて。⑦〔国〕疑問の意味を強めることば。そもそも。

【一対（對）】イッタイ　二つでひとそろいであること。また、そのもの。一双。〔古〕ヒトカサネ・ヒトクサリ（観名）

【一別】イチベツ　別れること。「洛城一別四千里」〔杜甫・恨別〕

【一・抔土】イッポウド・ボウド　①両手でひとすくいの土。②転じて、墓。

【一・沐三・捉レ髪（髮）】イチモクニみたびかみをにぎる　一度髪を洗う間に、洗いかけの髪を握ったまま三度も客にあう。君主が広く天下の賢者を求めるのに熱心なさま。「一飯三吐」哺イッパンニみたびくちをはく」とも。〔史記・魯周公〕

【一往】イッオウ（ワウ）　①一度、出かけて行く。②〔国〕ひとおり。一応。

【一・臥】イッガ（クワ）　官吏にならず、民間人として暮らす。

【一刻】イッコク　①わずかな時間。②〔国〕かたくなで、がんこなこと。〔国〕一国。

【一刻千金】イッコクセンキン　楽しい時などには、過ぎ去っていくわずかな時間が千金にもあたるようでおしいこと。「春宵一刻値千金」〔蘇軾・春夜〕

【一刻者】イッコクもの　〔国〕「一国者」と同じ。

【一国（國）】イッコク　〔国〕「一刻」と同じ。

【一国（國）者】イッコクもの　〔国〕①かたくなで、がんこな人。②おごりっぽい人。〔国〕一刻者。

【一・狐・之・腋】イッコのセキキ　一匹の狐きつねの腋わきの下の部分の白く美しい毛皮。▽珍しくて貴重なもののたとえとして用いる。〔史記・趙〕

【一枝春】イッシのはる　梅の花のこと。〔陸凱・贈范曄〕

【一周忌】イッシュウキ（シウキ）　〔仏〕人の死から満一年後の同月同日に行う法事。一回忌。

【一所不住】イッショフジュウ（ヂユウ）　〔国〕居場所を定めず旅をすること。行脚僧などの境遇をいう。

【一所懸命】イッショケンメイ　〔国〕①封建時代、領主から賜った一か所の領地だけに命をかけて生活すること。②転じて、熱中して物事を行うこと。▽のち、「一生懸命」とも。

【一炊・之夢】イッスイのゆめ　⇨邯鄲之夢カンタンのゆめ（三四三ページ）

【一○斉（齊）】イッセイ　①みんなそろっていて等しい。〔荘子・秋水〕②多くの者がいっしょにそろって物事をするさま。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

【一昔】㊀イッセキ 一夜の間。㊁ひとむかし 〔国〕ちょっと考えて昔と思われる過去。▽普通、十年前をいう。

【一*刹*那】イッセツナ 〔仏〕非常に短い時間。瞬間。▽おとなが一度指をはじく間に六十五刹那あるという。〔倶舎論・一二〕

【一知半解】イッチハンカイ 物事を少しだけ知っていて、すべてをじゅうぶんに理解していないこと。なまわかり。半可通。〔潛浪詩話〕

【一定】㊀イッテイ ①物事が一つに決まる。また、一つに決める。②一つの状態に定まっていて、かわらない。㊁イッジョウ きっと。必ず。

【一念】イチネン ①〔仏〕非常に短い時間。②〔仏〕現在の瞬間の心。③深く心に思うこと。また、そのひたむきな思い。「坐覚一念逾新羅＝坐もろに覚ゆ一念新羅を逾・えんと」〔蘇軾・百歩洪〕

【一服】イップク ①粉の薬、茶・たばこを少しのむこと。②〔国〕ひと休み。

【一°抹】イチマツ ①おしろい・絵の具などを、少しぬること。②〔国〕悲しみ・不安などが、ほんの少しあること。▽「一抹の」の形で用いる。

【一味】イチミ ①食べ物の味が一つで単調なこと。②ひたすら。もっぱら。「一味勤護」③〔国〕同じ仲間。「一味徒党」

【一門】イチモン ①同姓の一族。②同じ宗派・流派の人。

【一*竿風月】イッカンフウゲツ 魚釣りをしたり自然を楽しんだりして、世間の俗事を忘れること。▽「一竿」は、一本の釣り竿。〔陸游・感旧〕

【一軍】イチグン 軍隊全部。全軍。

【一計】イッケイ あるはかりごと。

【一茶*頃】イッサケイ 〔仏〕一度茶を飲む間。わずかな時間のこと。類一食頃。

【一乗(乘)】イチジョウ 〔仏〕仏の教え。すべての人間を乗せて、生死の苦界から悟りの境地にいたらせるための唯一の教えの意。〔法華経・方便品〕

【一食万銭(萬錢)】イッショクマンセン 一度の食事に一万銭を費やす。非常にぜいたくであることのたとえ。〔晉書・任愷〕

【一食*頃】イッショク・イチジキケイ 〔仏〕一度食事をする間。わずかな時間のこと。類一茶頃。

【一神教(教)】イッシンキョウ 宇宙を支配する神はただ一つであるとして、その神を信仰する宗教。キリスト教・回教など。

【一洗】イッセン すっかり洗いおとす。

【一点(點)鐘】イッテンショウ 〔俗〕①一時間。②午前、または午後の一時。

【一派】イッパ ①川の、ある一つの支流。②学芸・宗教などの、ある一つの流派。③一つの仲間。一味。

【一品】㊀イッピン ①ある一つの種類。②非常にすぐれたもの。「天下一品」㊁イッポン 〔国〕昔、親王の位の第一位。

【一面識】イチメンシキ 一度あったことがあって、その人を知っていること。

【一律】イチリツ ①ある一つの法則・秩序。②全体が同じ調子・型で変化がないこと。「千編一律」③全体が同じ程度で同時に行われること。

【一夏】㊀イッカ 夏じゅう。夏の間。ひとなつ。㊁イチゲ 〔仏〕夏、僧が一室に閉じこもって修行する陰暦四月十五日から七月十四日までの期間。夏安居。安居。

【一家】イッカ ①一つの家族全体。一族。▽「イッケ」とも読む。②学芸・宗教などの、ある一つの流派。③〔国〕ばくちうちなどで、同じ親分についている仲間。

【一家言】イッカゲン その人独特の意見。また、ひとかどの権威のある意見。「一家之言」とも。〔史記・太史公自序〕

【一家*眷属(屬)】イッカケンゾク ①一族と、その配下の者たち。②その派に属する人々。

【一家〔成二一家〕】イッカをなす ほかとは違った独特の存在となる。

【一挙(舉)】イッキョ ①ある一つの激しい行動。②物事を一気に行うさま。

【一挙(舉)一動】イッキョイチドウ 一つ一つの動作・行動。

【一挙(舉)手一投足】イッキョシュイトウソク 手をあげたり足を動かしたりするくらいのちょっとした動作。〔韓愈・応科目時与人書〕

【一挙両(舉兩)得】イッキョリョウトク 一つの事を行うことによって二つの利益を得ること。一石二鳥。〔晉書・束皙〕

【一座】イチザ ①その場にいあわせる人全部。②〔国〕その場の第一の上座。③〔国〕ともに興行している芸人の一団体。

【一殺多生】イッサツタショウ 〔仏〕ひとりをぎせいにして多くの人を生かすこと。〔報恩経〕

【一将(將)功成万(萬)骨枯】イッショウコウナリバンコツかる ひとりの大将が功名を得られたのは、多くの兵士が命をすてた結果である。上の者だけが功名を得て下の者の努力が認められないことを嘆くことば。〔曹松・己亥歳〕

【一*倡三*歎】イッショウサンタン ①祖先をまつる音楽を演奏するとき、ひとりが楽器にあわせて歌を歌うと、三人がこれにあわせて歌うこと。〔礼記・楽記〕②詩文のすぐれているのをほめることば。＝一唱三嘆。

【一笑】イッショウ ①ちょっと笑うこと。「破顔一笑」②〔国〕「一笑に付す」とは、軽べつして問題にしないこと。

【一陣】イチジン ①風や雨などがちょっとの間、吹いたり、降ったりすること。「一陣風」②〔国〕昔、戦場のさきがけのこと。先陣。

【一隻眼】イッセキガン ①片目。▽「隻」は、二つで一組になっているものの、片一方。②他の人と違ったすぐれた見識。

【一帯(帶)】イッタイ ①そのあたり一面。②ある地形が続いていること。

【一致】イッチ ①一つになる。同じ結果になること。②多くのものが一つにまとまる。協力する。

【一途】㊀イット ある一つのやり方。また、ある一つだけのやり方。「負爾非一途＝なんぢに負ひく一途にあらず」〔王維・哭殷遙〕㊁イチズ 〔国〕ひたすら、一つのことを思いこむさま。

【一般】イッパン ①状態などが同じであるさま。②全体。すべて。③普通であること。通常。

【一脈相通】イチミャクあいつうず 〔国〕物事が、ちょっと似ていること。

【一流】イチリュウ ①他と異なる一つの流派や、流儀。②いちばんすぐれたものや、人。③やり方などが独特であること。

【一連】イレン 〔国〕いくつかの物事が関係があってひとつながりであること。▽「一連の」の形で用いる。

【一貫】イッカン はじめから終わりまで主義・主張などをかえないで行うこと。「終始一貫」

【一*掬】イッキク 両手でひとすくいしたほどの量。＝一匊。「秋風一掬孤臣涙＝秋風一掬孤臣の涙」〔元好問・即事〕

【一*偈】イチゲ 〔仏〕一句の字数のそろった四句からなる韻文形式の経文。

【一*毫】イチゴウ ほんのわずかであること。▽「毫」は、細い毛。「雖一毫而莫取＝一毫といへども取ることなかれ」〔蘇軾・赤壁賦〕

【一視同仁】イッシドウジン だれそれの区別なく、すべての者を平等に愛すること。「聖人一視而同仁＝聖人は一視にして同仁」〔韓愈・原人〕

【一進一退】イッシンイッタイ ①進んだり退いたりすること。〔荀子・修身〕②物事が思うようにいかず、情勢がよくなったり悪くなったりすること。

【一掃】イッソウ とり除いてすっかりなくすこと。

【一張一*弛】イッチョウイッシ ①弓や楽器などの弦をしめたり、ゆるめたりすること。②人を扱う態度が、あるときはきびしく、あるときは寛容なこと。〔礼記・雜記下〕

【一張°羅】イッチョウラ 〔国〕①ただ一枚の晴れ着。②その人が持っている着物のうち、最も上等な着物。③一枚しかない着物。「一帳羅」とも。

【一転(轉)】イッテン 物事の状態がすっかりかわること。

【一堂】イチドウ ①ある一つの建物・へや。②堂の中にいる者すべて。

【一得一失】イットクイッシツ 得がある反面、損もある。一利一害。

【一敗塗地】イッパイチにまみれる ひどく負けて地面にたたきつけられる。再起不能になるほど大敗すること。〔史記・高祖〕

【一部始終】イチブシジュウ 物事のはじめから終わりまでの詳しい事情。一五一十。

【一望】㊀イチボウ ひと目に見渡すこと。㊁イッボウ ただ一つのぞみ。

【一望千°頃】イッボウセンケイ 見渡すかぎり広々としていること。一望千里とも。▽「頃」は、面積の単位。

【一握】イチアク ①ひとにぎりほどの少しの量。②にぎりこぶしの中。掌中。〔列子・湯問〕

【一過】イッカ ①その場所をさっと通り過ぎる。②文書・書物などをひととおり読む。③一生涯。

【一△喝】イッカツ しかられた者がびっくりするような大きなひと声でしかること。

【一閑張】イッカンバリ 〔国〕漆器の一種。紙張りの上に漆をぬった細工物。

【一*揆】イッキ ①程度・種類・方法などが同じであること。②〔国〕農民・信徒などが団結して代官や守護などに反抗すること。「百姓一揆」

【一喜一憂】イッキイチユウ 喜んだり心配したりすること。

【一期】㊀イッキ ある期間をいくつかにわけたひとくぎり。㊁イチゴ 〔仏〕人の一生。

【守二一°隅一°而遺二万(萬)方一】イチグウをまもりてバンポウをわする 戦争のとき、ひとすみだけを守って、四方全体の守りを忘れる。小事にこだわり、大事を見失うこと。〔淮南・泰族〕

【一*壺天】イッコテン 小さな世界。小天地。また、俗世間を離れた理想の世界。別世界。〔後漢・費長房〕↓壺中天。

【一場春夢】イチジョウのシュンム 春の夜の短い夢。その場限りのはかない人生のたとえ。

【一尊】イッソン ある一つの権威ある学説。〔史記・秦始皇〕

【一*飧*之徳（德）】イッソンノ 一度だけ食事をふるまわれた程度のわずかな恩恵。〔荀志・法正〕

【一朝】イッチョウ ①早朝。朝早く。〔詩・小雅・彤弓〕②わずかの間。〔荘子・逍遙遊〕③事件などがおこることを仮定するときのことば。いったん。④朝廷の人々全体。⑤決まった期間に、一度天子に目通りすること。〔史記・高祖〕

【一朝一夕】イッチョウイッセキ 期間が非常に短いことのたとえ。▽多く、打ち消しのことばを伴う。〔易・坤〕

【一程】イッテイ ①ある一つの道すじ。②一日のうちに進む道のり。

【一統】イットウ ①一つにまとめて統一する。②一つの系統だけであること。③〔国〕仲間全体。一同。

【一道】イチドウ ①ある一つの道路。②ある一つの道理。ある一つの方法。〔孟・公下〕③ある一つの芸道。④一筋だけであること。⑤一通の文書。答案。

【一番*槍】イチバンやり 〔国〕①まっさきに敵陣に攻め入り、槍をつき入れること。②転じて、最初に功名をたてること。＝一番鑓。

【一*斑】イッパン 物の一部分。▽「斑」は、豹の毛皮の斑文。

【一*斑評二全*豹一】イッパンヒョウヲヒョウスル 豹の毛皮の一つの斑文から、その豹の毛皮の全体を評価する。物事の一部分だけを見て、その全体を批評すること。〔晉書・王献之〕

【一飯】イッパン 一杯の飯。また、一度の食事。わずかばかりの恩恵のこと。「昔人一飯猶思報昔人一飯なほ報ぜんことを思ふ」〔呉偉業・過淮除有感〕

【一飯三吐】*哺】イッパンニみたびホをはく 一度の食事ちゅうに、三たび口の中の食物を吐き捨てて、客をむかえる。君主が天下の賢者を求めることに熱心なこと。「一沐三捉髮」〔史記・魯周公〕

【一筆啓上】イッピツケイジョウ 〔国〕男が手紙のはじめに書くあいさつのことば。▽お手紙を差しあげますの意。

【一報】イッポウ ちょっと知らせること。また、その知らせ。

【一*揖】イチユウ（イフ） 軽くおじぎをすること。

【一葉落知二天下秋一】イチヨウオチテテンカノアキヲシル あおぎりは他の木よりも早く落葉するので、あおぎりの葉が一枚落ちるのを見れば秋が来たことがわかる。わずかのきざしを見てそのあとからおこる物事を推測する。

【一陽来（來）復】イチヨウライフク ①陰暦十一月、または冬至のこと。▽陰暦十月は陰の気ばかりであるが、十一月になると陽の気が一つもどってくる、という易の考え方に基づく。②冬が過ぎて春が訪れること。また、転じて、新年。③苦しい時期が過ぎ幸運がひらけはじめること。

【一*葦】イチイ 一そうだけの小舟。▽一束の葦しの意から。「縱一葦之所如＝一葦の如く所を縱ほしいままにす」〔蘇軾・赤壁賦〕

【一意】イチイ ①ある一つのひたすらな考え。②イチイヲ一つのことだけに心を集中する。同壱意。③イチイニス みんな心をあわせる。

【一意専（專）心】イチイセンシン 心を一つに集中して物事に励むさま。

【一*裘一*葛】イッキュウイッカツ 一枚の皮ごろも（＝裘）と、一枚のくずかたびら（＝葛）。貧しくて、冬着と夏着を一枚ずつしか持っていないこと。〔韓愈・送石処士序〕

【一*鈎】コウ 新月のたとえ。▽一本の釣り針の意。

【一献（獻）】一ケン 一度酒をすすめるだけの簡単な酒宴。〔国〕①一度杯に酒をついですすめる。②わずかの量の酒。

【一*盞】チャン 一つの杯。また、わずかな量の酒。

【一*盞燈】トウサン 一つだけのさびしげな燈火。

【一触即発（觸即發）】イッショクソクハツ ①ちょっとさわるとすぐに爆発しそうなこと。②非常に危険な状態のこと。

【一新】シン すべてが改まってすっかり新しくなる。また、そうする。

【一路平安】イチロヘイアン 旅の道中ずっと無事であるようにと、旅人を送るあいさつのことば。

【一概（概）】イチガイ ①すべてを同じ態度・やり方でとり扱うさま。ひっくるめて。②同じ。等しい。

【一層（層）】イッソウ 〔国〕ひときわ。更に。

【一端】タン ①物事の一方の端。②一部分。

【一髮（髮）】イッパツ ①非常に少しのもののたとえ。▽一筋の髪の毛の意。②はるか遠くにある山が一筋の髪の毛のように細く横たわって見えること。「水天髣髴青一髮＝水天髣髴（ぼんやりと）青一髮」〔顧山陽・泊天草洋〕

【一髮（髮）引二千*鈞一】イッパツヲヒクセンキンヲ 千鈞の重さのものを一本の髪の毛で引っぱる。非常にむりなこと。〔韓愈・与孟尚書書〕

【一*碧万（萬）*頃】イッペキバンケイ 海や湖の水が見渡すかぎり青々と広がっているさま。▽「頃」は、面積の単位。〔范仲淹・岳陽楼記〕

【一網打尽（盡）】イチモウダジン 一度網をうって魚をみんな捕らえる。一度に敵や犯人をみんな捕らえること。〔宋史・汪純仁〕

【一撃（擊）】イチゲキ ①鳥が軽くひと飛びする。②激しく一回うつこと。

【一撮】サツ ひとつまみほどのわずかな量。「一撮土（わずかな土地）」〔中庸〕

【一*餉】ショウ 一回食事するほどの短い時間。片時。古劇シハシハカリ（観名）

【一徹】テツ 〔国〕一筋に思いこんで、がんこなこと。

【一*蓮*托生】イチレンタクショウ ①〔仏〕同じ心で念仏を唱えれば、死後、極楽で同じ蓮華（はすの花）の上にうまれること。②みんなが同じ行動をし、運命をともにすること。「一蓮託生」とも。

【出二一頭地一】イットウチヲ 頭の高さだけ抜き出る。ほかの人よりいちだんとすぐれていること。〔宋史・蘇軾〕

【一*臂】ビ ①一つのひじ。片腕。②助けとなる人。

【一*瞥】ベツ ちょっと見ること。

【一*篷】ホウ 小舟。▽「篷」は、竹や、かやで編んだ船のおおい。

【一覧（覽）】ラン ①ざっと、ひととおり見る。②ひと目に見渡す。③物事を簡単に知ることができるように、わかりやすくまとめて書いた物。

【一*縷】ルイ 望みなどが、絶えてなくなりそうなほどにほんの少しであること。▽「縷」は、糸すじ。

【一*簣】キ 一つのもっこに盛った土ほどのわずかな量。

【一*簣*之功】イッキノ 最後のひともっこの土を盛る努力。物事の最後の仕上げとなる、あとひといきの働きのこと。⇨九仞功虧二一簣一（キクジンノクヲ一二九ページ）

【一騎当（當）千】トウセン ひとりの騎兵が千人に匹敵できる力を持つ。非常に強いこと。一人当千。▽「当」は、相当する。

【一*瀉千里】センリ ①川の水が一度流れ出すと、一気に千里も流れる。川の流れが激しくて速いことのたとえ。②文章や話が非常に勢いがいいこと。③物事を非常に速く勢いよくすること。▽「瀉」は、外へ流れ出る。

【一瞬】シュン ①一度またたくほどのほんの短い時間。②ひと目で見渡す。③〔国〕物事をしたそのとき。

【一*觴一詠】イッショウ（ショウ） 酒を飲みながら詩をうたって楽しむ。▽「觴」は、杯のこと。〔王羲之・蘭亭集序〕

【一*箪食一*瓢飲】イッタンノシイッピョウノイン 箪（竹製の食器）一杯の飯と、瓢（ひょうたんの実でつくった酒器）一杯のしる。粗末な食事のこと。「箪食瓢飲」とも。〔論・雍也〕

【一*擲】チキ いっぺんに投げつける。勝負をするために、すごろくのさいなどを投げること。

【一韻到底】イチイン（ヰン）トウテイ 古詩で、全篇が一韻であること。

【一*蹴】シュウ（ジュウ）・シュク ①いっぺん地面をけって飛びあがる。②申し出などをまったく問題にせず、あっさり断る。

【一*轍】テツ ①車が通った同じあと。②同じ結果になること。

【一*嚬一笑】ヒンイッショウ ちょっと顔をしかめたり、ちょっと笑ったりすること。〔韓非・内儲説上〕

【輸二一*籌一】ユイチチュウヲ 勝負に負ける。▽「籌」は、勝負を争うときの数取りの道具。「輸」は、負ける。

【一顧】コ ①ちょっとふりかえって見る。また、ちょっと注意して見る。②人から世話されること。また、人を世話すること。

【一顧傾城】イッコケイジョウ 美人がちょっとふりかえってにっこり笑うと、その美しさに迷った国王が一つの城とひきかえに美人を得ようとする。▽絶世の美人を形容することば。〔漢書・外戚〕⇨傾城・傾国（九三ページ）

【一躍】ヤク ①ひとはねすること。②途中の段階を通らずに、いっぺんに地位があがること。

【一*饋*而十起】イッキニとたびたつ 一度の食事ちゅうに、十回もたって賢者にあう。夏ヵの禹ウ王が賢者を求めるのに熱心だった故事。▽「饋」は、食事。〔淮南・氾論〕

【一*攫千金】イッカクチキン いっぺんに、たやすく大金をもうける。▽「攫」は、つかむ。

【聞二一知一十】イチヲきいてジュウヲシる 一つのことを聞くと、すぐに十のことを悟る。非常に賢いこと。〔論・公冶長〕

【七】

1 一 (2) 教

音用音訓 シチ 「七曜表」 なな 「七月日」 ななつ 「七つ道具」 なの 「七日」

注 「七日」は、「なぬか」とも。

意味 ①（数）ななつ 数のななつ。▽其子七兮＝その子七つ。〔詩・豳風・鴟鴞〕

②（数）なな 順番の七番め。「七位」

③（副）ななたび 七回。七度。「七戦皆獲＝七たび戦ひてみな獲り」〔左伝・襄二〕

〔国〕ななつ 昔の時刻の名。今の午前、または午後の四時。

シチ 呉 シツ 漢 入質

tsiet-tsiet-tsiet-tsiei-tśi(qi)

解字 縦線を横線で切り止め、端を切り捨てるさまを示す指事文字。また、分配するとき、三と四になって、端数を切り捨てねばならないことから、中途はんぱな印象をもつ数を意味する。七は切の原字。

古訓 ナナトコロ〔観名〕

名のり かず・な・なな

【七七日】シチシチ〔仏〕人の死後四十九日の間。また、その四十九日目。その間、死者は成仏しないといわれる。七日ごとに供養をして死者のめいふくを祈る。ななぬか。なななのか。

【七十二候】シチジュウニコウ 陰暦で、一年の七十二の区分。自然現象に基づいてわけ、一候を五日、六候を一か月、七十二候を一年とする。

【七十子】シチジッシ 孔子の門弟の中で、特にすぐれた七十余人の人々のこと。▽「史記」の孔子世家篇では七十二人。七十は、おおよその数。〔孟・公上〕

【七夕】シチセキ 陰暦七月七日の夜、牽牛・織女の二星が天の川を渡って一年に一度だけあうという伝説に基づく祭り。紙や糸などを供えて裁縫などの上達を祈る。たなばた。乞巧奠・キッコウデン・キコウデンとも。▽日本では五節句の一つ。〔荆楚歳時記〕

【七大】シチダイ〔仏〕万物を形成する七つの元素。地・水・火・風・空・見・識のこと。〔楞厳経〕

【七大寺】シチダイジ〔国〕奈良にある、東大寺・興福寺・西大寺・元興寺・大安寺・薬師寺・法隆寺のこと。

【七五三】㊀シチゴサン〔国〕子どもの成長を祝う行事。男の子は三歳と五歳、女の子は三歳と七歳に当たる年の十一月十五日に行う。晴れ着を着せ、神社などに参拝する。㊁しち〔国〕「七五三縄しめなわ」の略。不浄のものがはいることを禁ずるために、神前に張るなわ。注連しめ。

【七孔針】シチコウ・シチコウのはり 漢代、七月七日に、宮女が色糸を通す遊びに使う七つの穴をあけた針。㊇七孔鍼。

【七尺】シチシャク・シチセキ ①二十歳のこと。②一人まえの男子。おとな。

【七去】シチキョ 儒教で、妻を離縁できる七つの条件。夫の両親に従順でない、子どもをうめない、品行がみだらである、ねたみ深い、おしゃべりである、盗みをする、治りにくい病気があるの七つのこと。▽これらのうち、一つでもあてはまれば離縁してよいとされた。「七出」とも。〔大戴礼・本命〕

【七出】シチシュツ・シチスイ 「七去」と同じ。

【七生】シチショウ(シチセイ)・シチセイ〔仏〕人が七度うまれかわること。「七有」ともいう。

【七言】シチゴン 漢詩で、一句が七字(七音節)からなるもの。絶句・律詩・古詩がある。

【七言古詩】シチゴンコシ 漢詩の一形式。一句が七字からなり、句数・韻が一定していない。七古。

【七言律詩】シチゴンリッシ 漢詩の一形式。一句が七字で八句からなり、第三句と第四句、第五句と第六句がそれぞれ対句になる。七律。

【七言絶句】シチゴンゼックク 漢詩の一形式。一句が七字で、四句からなり、第一・二・四句の句末に韻をふむ。七絶。

【七国(國)】シチコク 中国の戦国時代の七つの強国。斉・楚・秦・燕・趙・魏・韓。「七雄」とも。

【七国(國)之乱(亂)】シチコクのランン 前漢の景帝が、諸侯の領地を縮小しようとしたことに反対して、呉・楚・趙・膠西・膠東・菑川・済南の七国の諸王が同時におこした乱。

【七歩才】シチホのサイ すぐれた詩をすばやくつくる、すぐれた才能のこと。魏の文帝(曹丕)が、才能のある弟の曹植をねたみ、七歩歩く間に詩をつくれといったのに対して、曹植はすぐに詩をつくったという故事から。つくったその詩を「七歩之詩」という。〔世説・文学〕

【七宝(寶)】㊀シチホウ〔仏〕七種の宝石。「無量寿経」では金・銀・瑠璃・玻璃・硨磲・珊瑚・瑪瑙。㊁ナナタカラ〔国〕「七宝焼」の略。表面にほうろうを焼きつけて図案をあらわした陶器や銅器。

【七夜】ナナヨ〔国〕子どもがうまれて七日めの夜にする、名前をつける祝い。お七夜。

【七音】シチオン ①中国の音楽で、音階をなす七種の音。宮・商・角・徵・羽・半宮・半徵のこと。七声。②人体の発音器官による七つの子音の種類。唇・舌・牙・歯・喉・半舌・半歯のこと。七声。

【七草】ナナくさ〔国〕①春の野山にさく七種類の草花。芹・薺・御形・清白・仏座・御形・蘩蔞のこと。春の七草。②秋の野山にさく七種類の草花。萩・尾花・葛・撫子・女郎花・藤袴・桔梗のこと。秋の七草。▽桔梗は、今の朝顔、または、昼顔とする説もある。

【七香車】シチコウシャ いろいろな香木でつくった美しいぜいたくな車。

【七政】シチセイ 太陽・月と、水星・火星・金星・木星・土星の五星のこと。七曜。▽古代の中国で、天文や暦を政治上重要視したことから政治に重要な七つのものの意。〔書・舜典〕

【七星】シチセイ 北斗七星のこと。「七星挂城聞漏板=七星城に挂かりて漏板聞こゆ」〔李賀・宮娃歌〕

【七珍】シチチン 「七宝」と同じ。

【七修類稿】シチシュウルイコウ(カウ) 書名。⇩付録「中国の名著」

【七校】シチコウ(カウ) 漢代に置かれた、中塁・屯騎・歩兵・越騎・長水・射声・虎賁の七校尉(近衛将校)が率いる軍隊。「心蘇七校前=心は蘇かえる七校の前」〔杜甫・喜達行在所〕

【七書】シチショ ⇩付録「中国の名著」

【七教(教)】シチキョウ(キョウ) 七つの教え。▽「礼記」の王制篇では、父子・兄弟・夫婦・君臣・長幼・友人・客に関する七つの教えとする。「大戴礼」では、人民を導くための七教として、敬老・順歯(年長者を尊ぶ)・楽施(ほどこしを楽しむ)・親賢(賢者に親しむ)・好徳(徳を好み親しむ)・悪貪(むさぼりをにくむ)・強果(へりくだって人に譲る)の七つとする。

【七経(經)】シチケイ 七種類の経書。㋑「易経」「詩経」「書経」「礼記」「楽記」「春秋」「論語」のこと。㋺「易経」「書経」「詩経」「周礼」「儀礼」「礼記」「春秋」のこと。▽数え方には、その他の説もある。

【七・絃琴】シチゲンキン 琴の一種。七本の弦のある琴。

【七情】シチジョウ(ジャウ) 人間が持つ七種の感情。喜・怒・哀・懼・(おそれる)・愛・悪・(にくむ)・欲のこと。〔礼記・礼運〕

【七転(轉)(・顛)八倒】㊀シチテンハットウ(タウ) 何度もころび倒れる。世の中がひどく乱れるさま。㊁シッテンタウ(タウ)〔国〕ひどく苦しんでころげまわること。

【七転(轉)八起】ナナコロビやおきる〔国〕何度失敗しても、屈せずに勇気を奮いおこすこと。

【七堂】シチドウ(ダウ)〔仏〕寺院に備わっている建物。▽「七堂」は「悉堂」で、建物の完備した寺の意ともいわれ、宗派によって、建物の名称も種類も異なる。南都六宗では、金堂・講堂・塔・食堂(または、中門)・経蔵・僧坊・鐘楼のこと。

【七略】シチリャク 書名。⇩付録「中国の名著」

【七道】シチドウ(ダウ)〔国〕①昔、律令制度における七つの行政区分。東海道・東山道・北陸道・山陽道・山陰道・南海道・西海道の七つのこと。②日本全国。

【七道具】ナナたつのドウグ〔国〕①武士が戦場で使う七つの道具。具足(よろいなど)・刀・太刀・弓・矢・母衣(矢を防ぐためにかぶった布)・兜のこと。②弁慶が常に持っていたという七種の武器。鎌・鋸・鉞・斧・熊手などの武器のこと。③常に持ち歩く一組の道具のこと。

【七雄】シチユウ 中国の戦国時代の七つの強国。秦・趙・斉・楚・燕・魏・韓のこと。「七国」とも。

【七福神】シチフクジン〔国〕福徳の神として信仰される七柱の神。大黒天・恵比須・毘沙門天・弁財天・布袋和尚・福禄寿・寿老人。

【七徳(德)】シチトク 七つの徳。▽「春秋左氏伝」では、武力の七つの徳として、暴力を禁じる、兵を治める、大を保つ、功を定める、人民を安んじる、衆をやわらげる、財を豊かにするの七つとする。唐の太宗の七徳の舞はこれに基づく。

【七賢】シチケン ①七人の賢人。▽周の七賢は、伯夷・叔斉・虞仲・夷逸・朱張・柳下恵・少連のこと。②竹林七賢(九五六ページ)

【七・竅】シチキョウ(キョウ) ①頭部にある七つの穴。両目・両耳・鼻・口の穴のこと。〔荘子・応帝王〕②聖人の胸にあるという七つの穴。▽比干が殷の紂王をいさめたとき、王は聖人の胸には七つの穴があるというからためそうといって比干を殺したという故事がある。〔史記・殷〕

【七難(難)】シチナン ①〔仏〕七種の災難。「法華経」では火・水・羅刹・刀杖・鬼・枷鎖・怨賊の難のこと。②〔国〕さまざまな欠点。

【七曜】シチヨウ(エウ) ①太陽・月と木星・火星・土星・金星・水星の五星。七政。②一週の七日。▽一週間の七日に「七曜①」を当てるのは、ユダヤ教・キリスト教の習慣から出ている。

一【丁】1 (2)教

当用音訓 チョウ「丁半・落丁」 テイ「丁字路・壮丁」 **注** 「叮」「鄭」「挺」「釘」「頂」「牒」の書きかえ字として用いることもある。

㊀チョウ(ヂャウ)㊥・テイ㊤ ㊥青 teg-teg-tiag-tiag(ding)
㊁チョウ(ヂャウ)㊥・トウ(タウ)㊤ ㊥庚 (耕) teg-teg-tiag-tiag(zheng)

丁

【意味】㊀❶（名）**ひのと**　十干の四番め。▽五行では火に当てる。日本の兄弟の「ひのと」は、「火の弟」の意。順位の第四位も示す。
❷（動）**あたる**　年順・時・役目にあたる。「丁憂＝憂ひに丁る」「壮丁（年ごろの若者）」
❸（名）壮年の男。「成丁」
❹（名）人夫。「園丁」
❺（形）ちょうどしおどきにあたって盛んであるさま。
㊁「丁丁」とは、物がうちあたる音などの形容。
【国】❶書物の紙数を数えることば。紙面の表裏二ページを一丁という。
❷町の通路のこと。▽町に当てた用法。
❸距離の単位。一丁は、六十間で約一〇九メートル。
❹**ちょう**（ちょう）さいころの目で、偶数。対半。
【解字】甲骨・金文は特定の点、またはその一点に打ちこむくぎの頭を描いた象形文字。篆文は丁型に書き、平面上の一点に直角にくぎをあてたさま。丁は釘（くぎ）の原字。一点に止まることでは、停＝定と同系のことば。また、直角にあたることでは、頂（垂線に直角にあたるいただき）と同系のことば。
古訓アタル・（アツ）・イホノカシラノホネ・サカユ・サカリ・ヒノト・ヨトコ（観名）
名のり あたる・あつ・つよし・のり・ひのと・よぼろ
▽仕丁・包丁・成丁・壮丁・役丁・乱丁・使丁・庖丁・馬丁・符丁・落丁・園丁
【丁丁】㊀（擬）おので木を切る音、くいを打つ音、鳥の鳴き声、碁をうつ音、琴をひく音、雨の降る音などの形容。㊁元気なさま。㊂（国）続けて物を打ったときの響きのよい澄んだ音の形容。
【丁丁発（發）止】（国）刀などで互いに激しく打ちあう音の形容。また、そのさま。
【丁口】①成年の男子。②人民の数。人口。「国家丁口連四海＝国家の丁口は四海に連なる」（韓愈・寄盧仝）
【丁女】働き盛りの女。
【丁冬】「丁当」と同じ。
【丁半】（国）①さいころの目の偶数（＝丁）と奇数（＝半）。②さいころを振って出た目が偶数か奇数かによって勝負を決めるばくち。
【丁壮（壯）】若者。壮丁。
【丁当（當）】鈴や玉などが触れあって鳴る音の形容。また、琵琶などの音の形容。＝丁璫・叮噹。「丁東」「丁冬」とも。
【丁年】一人まえになる年齢。二十歳のこと。類成年。
【丁役】課せられた力仕事に従事する若い男。
【丁夜】五更の一つ。今の午前二時、およびその前後二時間。四更。
【丁東】「丁当」と同じ。
【丁香】熱帯に産する香木の名。実を丁子といい、香料にする。
【丁香結】「丁香」のつぼみ。▽気持ちがふさがって、晴れ晴れしないことにたとえる。
【丁（鄭）重】①礼儀正しくて、ていねいであるさま。②儀式を略さないで、手厚いこと。
【丁祭】孔子をまつる祭りの名。陰暦二月と八月のはじめの丁の日に行う。
【丁椎】㊀若者。㊁（国）商店などに年限を決めて使われる少年。小僧。
【丁銀】㊀丁年に達した者に課する税。㊁（国）江戸時代の銀貨の一つ。慶長丁銀・元禄丁銀などがある。
【丁寧（叮嚀）】念入りで、親切にすること。「丁寧相教防禍機＝丁寧にあひ教へて禍機を防ぐ」（黄庭堅・阻水泊舟竹山下）
古訓ネムコロ（観名）
【丁憂】父母の喪にあうこと。類丁艱。
【丁艱】父母の喪にあうこと。▽「艱」は、喪。類丁憂。
【丁瑄】「丁当」と同じ。

2 下 (3) 教

当用音訓 カ「下弦・門下」　ゲ「下旬・上下」　した「下着」　しも「下手・川下」　もと「足下」　さげる「下げる」　さがる「下がる」　くだる「下る・下り列車」　くだす「下す」　くださる「下さる」　おろす「下ろす・書き下ろし」　おりる「下りる」
▽「下手（へた）」
【意味】❶（名・形）**した・しも**　位置・場所・順序・品性・価値などがひくいほう。物・物事の流れの末のほう。また、物・物事の流れの末のほうであるさま。対上。「下流」「下位」
❷（名）**しも**　目下の人。また、身分のひくい人。対上。「下人」「下刻上」「下克上」
❸（名）**しも**　順序の後ろのほう。対上・前。類後。「下半夜」「下巻」
❹（名・形）**ひくい**（ひく）ひくい場所。また、場所がひくい。「猶水之就下也＝なほ水の下きに就くがごとし」（孟・告上）
❺（動）**さげる**（さ）・**さがる**　ひくくする。また、ひくくなる。対上。「低下」
❻（動）**くだる**　ひくいほうに向かう。おりる。対上・登。「下山」「下楼＝楼を下る」
❼（動）**くだる**　へりくだる。対上・尊。「卑下」「大国以下小国＝大国もつて小国に下る」（老子）
❽（動）**くだす**　命令などを申しわたす。「下命＝命を下す」
❾（動）**くだす**　実際にそのことを行う。「下筆＝筆を下す」
❿（助）管理をうける所の意をあらわすことば。…のあたり。「城下」「管下」
⓫（助）とうとい人を直接ささずに、その人のいる所をさしてその人を呼ぶ敬語。「殿下」「閣下」
⓬（形）（俗）つぎの。「下次（このつぎ）」「下月（つぎの月）」
【国】あらかじめすること。「下調べ」
【解字】おおいの下にものがあることを示す指事文字で、した、したになるの意をあらわす。上の字の反対の形。家（屋根をおおって下のものを隠す）＝仮（仮面でおおって下のものを隠す）などと同系のことば。
古訓（イタス）・イタル・イヤシフ・オル・オロス・カタハラ・クツカヘス・シタ・シタカフ・シモ・シモフト・ソコ・タマフ・タル・ノチ・ノチニ・フモト・ホトコス・マカル・ミシカシ・モト・（ヲツ）・ヲトス（観名）
名のり しじ・した・しも・もと
▽天下・手下・以下・目下・臣下・却下・言下・足下・門下・直下・城下・卑下・降下・部下・陛下・貴下・傘下・廊下・殿下・豊下・幕下・閣下・管下・膝下・闕下
【下人】㊀①召使。しもべ。▽古く主人が使用人に対して使ったことば。②地上の世界に生きている人。（楚辞・招魂）③人にへりくだる。「慮以下人＝慮ばかつてもつて人に下る」（論・顔淵）㊁身分の卑しい者。
【下下】㊀下のまた下。最下等。㊁（国）身分の高い人や支配者の立場から、一般民衆をいうことば。▽身分のひくい人々の意。
【下士】①上士・中士に対して、周代の士の階級で最下位の階級。また、その階級の人。②愚かな男。（老子）③へりくだってりっぱな人物と交わる。④（国）「下士官」の略。将校の下、兵士の上の階級の武官。▽もと陸海軍で用いた。
【下女】㊀①身分のひくい女。②働きがいちばん少ない女。㊁（国）雇われて雑事に従う女。女中。
【下土】①上天に対して、地面。大地。「日居月諸照臨下土＝日と月とは下土を照臨す」（詩・邶風・日月）②世の中。③低地。（書・禹貢）④いなか。
【下元】㊀三元の一つ。陰暦十月十五日のこと。
【下火】㊀（仏）禅宗で、死者を火葬にするとき、僧が火をつけ法語を唱えること。▽「アコ」は唐宋音。㊁（国）①火事の勢いが衰えること。②盛んだった物事の勢いが衰えること。③茶道で、あらかじめ炉に入れておく火。
【下戸】①貧しい家。②（国）酒があまり飲めないこと。また、その人。対上戸。
【下午】午後。対上午。
【下心】（国）①人に知らせない本心。②かねてからのよくないたくらみ。
【下手】㊀（国）技芸などが未熟なこと。対上手。㊁（国）①下のほう。②客席から見て舞台の左のほう。対上手。
【下手人】（国）自分で直接人を殺した者。
【下水】（国）①上水に対して、台所や、ふろ場などで使ったきたない水。②「下水道」の略。下水を流すみぞや、管。
【下司】（国）①身分のひくい役人。下役人。転じて、卑しい者の意。▽「ゲス」とも読む。②荘園の役人。
【下世】①この世からさがる。死ぬこと。「秦穆先下世＝秦穆公まづ下世す」（曹植・三良詩）②後世。③下界。
【下世話】（国）世間で普通に話されることばや話。
【下奴】①召使。②自分をへりくだっていうことば。③他人をばかにして呼ぶことば。

【下平】ヒョウ（ヘイ） 四声で、平声の一つ。⇨付録「中国の文字とことば」

【下付】フ 政府・役所が金銭や証明書・許可書などを一般の人に渡し与えること。下附。

【下民】カミン 世の中の人。人民のこと。

【下向】ゲコウ（カウ） 〔国〕①都から地方へいく。②神仏に参拝して帰ること。

【下交】カコウ（カウ） 上交に対して、身分の高い人が身分の低い人と交際する。〔易・繫辭下〕

【下旬】ゲジュン 上旬・中旬に対して、月の二十一日から月末までの十日間。

【下地】〔一〕カチ ①地味のやせた土地。②上天に対して、地面。〔二〕したじ（ぢ） 〔国〕①物事をする前の準備や基礎。②うまれつき。素質。③しょうゆのこと。▽吸い物をつくる下地の意。

【下年】カネン ①来年。②将来。

【下吏】〔一〕カリ 位のひくい役人。〔二〕りに（くだす） 身がらを司法官に渡して、罪を調べさせる。

【下劣】ゲレツ 人がらや、考え方などが下品で卑しい。

【下克【・剋】上】ゲコクジョウ（ジャウ） 下の位の者が、自分が仕えている上位の者をしのいで権力をふるうこと。「剋上作。

【下材】カザイ 才能の劣った者。

【下作】ゲサク 〔国〕作品や農作物のできばえが悪いこと。

【下車】ゲシャ ①車から降りること。②官吏が任地に着くこと。③人を葬るとき、副葬品として墓の穴の中に埋める車。

【下寿（壽）】カジュ 長寿者を上・中・下の三階級にわけた最下位。八十歳以上の長命な人のこと。▽一説に、六十歳以上の人。

【下走】カソク ①自分のことをへりくだっていうことば。▽「走」は、しもべ。〔漢書・蕭望之〕②車から降りて走る。

【下足】〔一〕カソク 走ることのおそい馬。〔二〕ゲソク ①身分の卑しい人。②〔国〕脱いだ履物。また、その履物の番をする人。

【下体（體）】カタイ ①からだの下半身。②植物の根や茎。〔詩・邶風・谷風〕③からだをかがめる。④男女の陰部。⑤自分の態度・考えをへりくだっていう。古 カフラ（観名）

【下・阪】ゲハン 〔国〕東京地方から大阪にいくこと。

【下町】したまち 〔国〕①上町に対して、土地のひくい所にある町。②山手に対して、都会でひくい土地にあって商工業者が多く住む所。

【下見】したみ 〔国〕①あらかじめ見て調べること。②家の回りの壁をおおう横板張り。雨がしみこまないように、わずかずつ重ねあわせてある。

【下里】カリ ①死んだ人の魂がいくという所。②村里。また、いなか。

【下学（學）上達】カガクジョウタツ（ジャウ） 手近なところから学んで、しだいに深い学問・道理に通ずること。〔論・憲問〕

【下学（學）集】カガクシュウ（シフ） 〔国〕意味分類体の漢和辞典。上下二巻。著者未詳。文安元年（一四四四）に成立。約三万の漢字および漢語を、天地・時節・神祇・人倫など十八部門に分類し、かたかなで読みを、漢文で意味をつけている。部門名と配列は、韻書として当時広く使われた「聚分韻略」によっている。江戸時代には広く一般に用いられた。

【下官】ゲカン（クワン）・カカン（クワン） ①地位の低い官吏。②官吏が自分のことをへりくだっていうことば。古 シモヘ（観名）

【下弦】ゲゲン 上弦に対して、満月ののち、次の新月までの、月が欠けて弓の弦を下向きにしたような形になった状態のこと。

【下国（國）】〔一〕カコク ①諸侯の国。②地方。③自分の国を謙そんしていうことば。〔二〕ゲコク 〔国〕①大宝令（タイホウリョウ）の制で、諸国を格式（キャクシキ）によって大国・上国・中国・下国の四階級にわけたうち、最下級の国。②都から自分の国へいく。③国司が任地にいく。

【下○肢】カシ 上肢（ジョウシ）に対して、足。脚部。

【下知】ゲチ 〔国〕①命令。▽「ゲチ」とも読む。②鎌倉・室町時代の裁判の判決。また、その判決文。

【下直】〔一〕ジキチ 宮中での宿直のつとめが終わること。〔二〕ゲチョク 〔国〕①値段が安くなること。②安い値段。

【下・邳】ヒ 地名。今の江蘇（コウソ）省邳（ヒ）県の東にあたる。秦（シン）の始皇帝の暗殺に失敗した張良（チョウリョウ）が隠れた。

【下物】カブツ 酒のさかな。圖下酒物。

【下命】カメイ ①くだされる命令などを申しわたす。②〔国〕上からのいいつけ・命令。

【下界】カイ 天上界に対して、人間の住む世界。この世。

【下・乗（乘）】〔一〕カジョウ ①足のおそい馬。②下等な者。〔二〕ジョウ ①〔仏〕平凡な教理。圖小乗。②〔国〕馬や車などの乗り物から降りること。

【下泉】カセン ①死者の住む世界という、あの世。黄泉（コウセン）。②流れる泉の水。〔詩・曹風・下泉〕

【下段】ゲダン 〔国〕①下の段。▽「カダン」とも読む。②武術で、刀や、やりを低く構える型。

【下品】〔一〕ヒン 上品に対して、卑しい地位。〔二〕ゲボン 〔仏〕極楽往生するときの三つの階級のうち、最下位。下品上生・下品中生・下品下生に三分される。⇨九品（クホン）（三九ページ）〔三〕ヒン 〔国〕人がら・性質などが卑しいこと。圖上品。

【下風】〔一〕カフウ ①下にいて支配を受ける地位。②風しも。〔二〕しもかぜ 〔国〕木などの下を吹く風。

【下屋敷】やしきやしき 〔国〕昔、上屋敷に対して、郊外などに設けた別邸。

【下郎】ゲロウ（ラウ） 〔国〕人に召し使われる、身分の低い男。▽「下臈（ゲロウ）」が転じたことば。

【下院】カインイン ①別の土地にたてられ、名義上、本山に支配されている寺。末寺。②二院制議会で、上院に対して、国民が選出した議員が組織する議院。

【下・浣】ゲカン（クワン） 月の二十一日から月末までの十日間。下旬。圖下澣。

【下降】カコウ（カウ） ①下る。降下。②天子の娘が臣下にとつぐこと。下嫁。

【下根】ゲコン 〔仏〕上根に対して、うまれつき愚かで、仏道修行の力のとぼしい者。▽「根」とは、草木の根が木を伸ばすように、人間に善悪をおこさせる根本的な力のこと。〔華厳経・二七〕

【下座】ゲザ・しもざ 座敷などで、身分・地位のひくい人がすわる座席。末席。圖上座。

【下剤（劑）】ゲザイ 便通をよくする薬。

【下酒物】カシュブツ 酒のさかな。圖下物。

【下馬札】ゲバ・げばふだ 〔国〕城門や社寺の前で、そこから中へ馬や乗り物ではいることを禁ずることを書いた立て札。

【下馬評】ゲバヒョウ（ヒヤウ） 〔国〕そのことに直接関係がない人々の間で行われている評判や、うわさ。▽昔、下馬札の所で、供の者が、主人を待つ間に世間のことをいろいろとうわさしたことから。

【下流】カリュウ（リウ） ①川の流れで川口に近い部分。川下。圖上流。②ひくいほうへ流れる。③ひくくて卑しい身分・地位。下位。圖上流。〔論・子張〕

【下・帷】カイ・くだ ①幕やカーテンなどを降ろす。②俗事から離れて読書生活をする。③塾を開いて子弟を教える。「白首下帷復何益＝白首帷を下すもまた何の益かあらん」〔李白・行行且遊獵篇〕〔淮南・天文〕

【下・舂】ジョウ（シヤウ） 夕方。▽「舂」は、太陽が没すること。

【下情】カジョウ（シヤウ） ①一般民衆の実情。また、一般民衆の考え。〔班固・両都賦・序〕②自分の考え・気持ちをへりくだっていうことば。

【下第】カダイ ①官吏登用試験に落第する。圖登第（トウダイ）。②試験の成績が非常に悪い者。圖上第。

【下陳】カチン ①後列。②宮女のへや。〔国策・斉〕

【下堂】カドウ（ダウ） ①堂から降りる。②くだりたまう。妻を離縁する。「糟糠之妻不下堂＝糟糠（ソウコウ）の妻は堂より下さず」〔後漢・宋弘〕

【下・婢】カヒ 召使の女。下女。

【下問】カモン 目下の者に質問する。「敏而好学、不恥下問＝敏にして学を好み、下問を恥じず」〔論・公冶長〕

【下野】〔一〕ゲヤ・くだる ①国の主権者が引退すること。②高い官職から引退して民間人になること。〔二〕しもつけ 〔国〕旧国名の一つ。東山道の一国。今の栃木県にあたる。野州。古 シモツケノ（和）

【下略】ゲリャク・リャク 文章を引用するときなどに、それ以後の部分を省くこと。以下省略の意。

【下策】ゲサク まずいはかりごと。圖上策。

【下衆】スゲ 〔国〕①身分がひくくて卑しい者。圖下種。②心の卑しいこと。また、その人。

【下達】カタツ ①上達に対して、本質的でないつまらない事がらを詳しく知る。「君子上達、小人下達＝君子は上達し、小人は下達す」〔論・憲問〕②上の者の意志を下の者に通じさせること。「上意下達」

【下等】トウ ①等級がひくくて劣っていること。また、その等級。圖上等。②下品で卑しい。③品物の質などが悪いこと。また、そのもの。圖上等。

【下番】バン 〔国〕上番に対して、交替制の勤務を終えること。また、勤務のない日。

【下筆】カヒツ ①（したふで） 詩文をつくる。②筆跡。

【下・游】カユウ（イウ） ①川の下流。また、その付近の地。圖上游（ジョウユウ）。②低い地位。圖上游。③泳ぐ。

【下落】〔一〕ラク ①物価が下がる。②品質が悪くなる。〔二〕ゲラク 〔俗〕①ゆくえ。所在。②物事にきまりがついて終わること。

【下荆】ゲリ 腹下し。

【下嫁】カカ 天子の娘が臣下に嫁ぐこと。下降。

【下愚】カグ 非常に愚かな者。「上知与下愚不移＝上知と下愚とは移らず」〔論・陽貨〕

【下緒】さげお 〔国〕刀のさやにつけるひも。刀を帯に結びつけるのに用いる。

【下獄】カゴク・ゲゴク・ごくだる 牢屋（ロウヤ）に入れる。また、入れられる。

【下様（樣）】げさま 〔国〕身分の低い者たちの社会。

【下総（總）】しもうさ（しもふさ） 〔国〕旧国名の一つ。東海

道の一国。今の千葉県の北部と、茨城県の南西部。

古訓 ンモツフサ(和)

【下種】 ㊀シュ 種をまく。㊁ 〔国〕「下衆」と同じ。

【下層（層）】 ①重なって層をなしているものの下のほうの層。②下の階級。下流。対上層。

【下*腿】 ひざと足首の間の部分。

【下僚】 地位のひくい官僚。小役人。

【下請】 〔国〕請け負った人から、さらにその仕事の全部あるいは一部を請け負うこと。下請負。

【下*駟】 ①能力の劣った馬。②他より劣った人。また、劣ったもの。

【下*賤】 身分がひくくて卑しいこと。また、その人。

【下輩】 ①身分がひくくて卑しい人。②目下の人。

【下*澣】 「下浣」と同じ。

【下*瞰】 高い所から見おろす。

【下*臨】 ①〔仏〕上蔟に対して、年功を積むことが浅くて修行のじゅうぶんでない僧尼。②〔国〕地位のひくい者。③〔国〕人に召し使われる身分がひくい男。下郎。

【下顧】 ①高い所から下を見おろす。②引きたてて「もらうこと。

一 2 【三】 (3) 教

当用音訓 サン 「三権・再三」 み 「三日月」 みつ 「三つ指」 みっつ 「三つ」 ▽「三味線（しゃみせん）」

意味 ❶(数) みっつ 数のみっつ。同参。 ❷(数) み 順番の三番め。同参。 ❸(数) いくつも。「三三五五」 ❹(副) みたび 三回。三度。「三拝九拝」 ❺(副) みたび たびたび。「再三」「三已之無慍色＝三たびこれを已めるも慍色無し」（論・公冶長）

解字 三本の横線で三を示した指事文字。また、参加の参と通じて、いくつもまじること。

甲 金 篆 隷

三 — 三 — 三 — 三

森（なん本もまじった木立）と同系のことば。また、杉・杉などの音符彡の原形で、いくつも並んで紋様を成すの意味を含む。▽日本では、奈良時代にはサムと音訳し、三位・三線といった。三郎のサブはその転音である。証文や契約書では、改竄や誤解をさけるため、参と書くことがある。

字体 【弐】は「二」の異体字。

古訓 ミトコロ(和)

名のり かず・ど・さぶ・さむ・そ・そう・ぞう・ただ・なお・み・みつ・みる

▽再三・初三・重三

【三七日】 ①〔仏〕人の死後二十一日め。また、その日に行う仏事。みなぬか。②〔国〕出産後二十一日め。また、その祝い。③〔国〕二十一日間。また、二十一日め。

【三十二相】 〔仏〕仏が身体に備えていたといわれる三十二のすぐれた特徴。（智度論・八八）

【三十六宮】 漢の武帝が築いた三十六の宮殿。「三十六宮土花碧＝三十六宮土花碧（こけ）なり」（李賀・金銅仙人辞漢歌）

【三十六策走是上計】 三十六の策略のうちで、逃げるべきときには逃げて安全をはかるのが最上の策である。困ったときには、その物事をさけるのがいちばんよいということ。（南斉書・王敬則）▽日本では「三十六計逃ぐるにしかず」という。

【三人成二市虎一】 まちの中に虎がいるはずはないが、三人までが虎がいるというと、ついにはだれもがこれを信ずるようになる。多くの人々がいうことは、うそでも人々が信じこむようになるということ。「三人成虎」とも。（韓非・説林）

【三人行必有二我師一】 自分とほかの二人との三人でいっしょに物事を行うとき、ひとりが自分よりすぐれていればそれに従い、もうひとりが自分よりすぐれていなければ自身を反省するから、必ず自分にとって師とすべきものがいるということ。（論・述而）

【三*叉】 道路などが三つにわかれていること。みつまた。「三叉路」

【三才】 易で、宇宙を構成する天・地・人のこと。「名著」

三元・三極。（易・説卦）

【三才図会（圖會）】 書名。⇨付録「中国の

【三三九度】 〔国〕結婚式で、夫婦の縁を結ぶために、新郎新婦が一つの杯で三度ずつ飲み、三つの組の杯で合計九度飲みあうこと。「ること。

【三三五五】 何人かずつ集まってあちこちにい

【三子】 ①老子・列子・荘子のこと。②孟子・荀子・楊子のこと。③魯の国の三卿といわれる孟孫・叔孫・季孫のこと。

【三*尸】 「三虫」と同じ。

【三*已】 陰暦三月三日の節句。上巳。

【三上】 文章を練るのに最適の三つの場所。馬上・枕上・厠上（便所の中）のこと。作文三上。（欧陽脩・帰田録）

【三寸舌】 弁舌のこと。（史記・平原君）

【三千世界】 ①〔仏〕須弥山を中心とする世界を千倍した小千世界と、小千世界を千倍した中千世界と、中千世界を千倍した大千世界のこと。三千大千世界。（智度論・七）②広い世界。この世のこと。

【三元】 ①上元（陰暦一月十五日）・中元（陰暦七月十五日）・下元（陰暦十月十五日）のこと。②天・地・人のこと。圏三才。③正月元日のこと。▽年・月・日のはじめという意。④明・清代、進士の試験に及第した上位の三人のこと。⑤清代、郷試・会試・廷試の三つの試験に第一位で及第した者。解元・会元・状元をいう。

【三五夜】 陰暦十五日の夜。特に八月十五日の夜。「三五夜中新月色＝三五夜中、新月の色」（白居易・八月十五日夜禁中独直）

【三公】 ①臣下の最高の三つの官職。三槐。④周では、太師・太傅・太保。北周・元・明・清はこれにならった。㊁前漢代、丞相（大司徒）・太尉（大司馬）・御史大夫（大司空）。㊂後漢以後、隋・唐の太尉・司徒・司空。②〔国〕昔、三人の大臣のこと。三槐。太政大臣・左大臣・右大臣。のちに左大臣・右大臣・内大臣。

【三尺】 ①剣のこと。▽「三尺」は剣の長さ。（漢書・高帝）②法律のこと。三尺の法。▽昔、三尺の長さの竹札に法律の条文を書いたことから。③刑罰の道具の名。足のくるぶしをはさむ物。㊂〔国〕へこおび。

【三尺童子】 子ども。▽一説に、一尺は二歳半で、七、八歳の子どものこととも。

【三王】 中国古代の三人の聖王。夏の禹王、殷の湯王、周の武王。▽一説に、周は文王・武王をあわせて数える。

【三*巴】 ㊀ 漢末に、巴郡・巴東郡・巴西郡があった地域。今の四川省東部、湖北省に近いところ。「三春三月憶三巴＝三春（春）三月三巴を憶ふ」（李白・宣城見杜鵑花）㊁ 〔国〕①紋所の一つ。三つの巴ともの模様が隣りあって組みあわさり、円形をした形。②三者が互いに対立して争うこと。

【三不去】 昔、中国で妻を離縁してはならない三つの場合。妻が帰る家のないとき、父母の喪をつとめ終えたとき、夫がはじめ貧乏で、のちに富貴になったときの三つのこと。（大戴礼・本命）

【三不孝】 三つの不孝。親にへつらって調子をあわせ、親を不義におとしいれる不孝、貧乏で、しかも年老いた親がいるのに官職につこうとしない不孝、嫁をもらわず子もうまず、父祖の祭りをしない不孝のこと。（孟・離上・趙岐注）

【三分・鼎足】 鼎に三本の足があるように、三者が天下を三分して同じような勢力をもつこと。（史記・淮陰侯）

【三方】 〔国〕神前に供える物を載せる台。四角な折敷の下に胴がついていて、胴の前と、左右に穴があいている。

【三文】 〔国〕価値が低いことのたとえ。「三文判」

【三友】 ①琴・酒・詩のこと。（白居易・北窓三友詩）②松・竹・梅のこと。（月令広義）③山水・松竹・琴酒のこと。（元結・丐論）④「論語」の季氏篇に見える三種類の友。益のある友として、直（直言する）・諒（思いやりがある）・多聞（見聞が広い）の人。損のある友として、便辟（体裁をつくろって正直でない）・善柔（人あたりがよいだけである）・便佞（口先ばかりうまい）の人。

【三司】 ①後漢の三公、太尉・司徒・司空。②唐の司法機関である三法司、刑部・御史台（都察院）・大理寺。③五代・北宋の塩鉄・戸部・度支。④明の布政使司・按察使司・都指揮使司。⑤清の布政使司・按察使司・提学使司。

【三史】 三つの歴史書。④「史記」「漢書」「後漢書」のこと。㊁「史記」「漢書」「東観漢記」のこと。▽その他にも説がある。

【三世】 ㊀①祖父・父・子の三世代。②父・子・孫の三世代。③公羊学では、自分の父の時代（見るところの世）、祖父の時代（聞くところの世）、曾祖・高祖の時代（伝聞するところの世）をさす。これを従来衰乱・升平・太平といい、人間社会の進展する過程と説く。㊁〔仏〕過去・現在・未来のこと。

【三代】 ①中国古代の、夏・殷・周の三王朝。②祖父・父・子の三世代。

【三冬】 ①陰暦で、冬にあたるとされる三つの月。孟冬（陰暦十月）・仲冬（陰暦十一月）・季冬（陰暦十二月）のこと。②三度の冬。三年間のこと。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com